世界最恐の海兵、又の名を「慈愛の副元帥」

anmnmn

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

子供を庇ってトラックに轢かれたオリ主。

目が覚めたら知らない場所にいてなぜだか身体も女になってて・・？

見たことある拳骨のおじさんもいるし、ゴムの男の子もいる!?

彼女・・「モンキー・Ｄ・レオナ」はこの世界でどう生きるのか・・・

シリアス少な目にするつもりです。

▼追記

タグを整理することにしたため1度消しました
ストーリーが進むと同時に追加したいと思います
所々修正したり追加しました。分かりにくいところがあったため

３／１７　０～３話　少し修正と文章の追加を行いました。

目次

0話「転生」――――――――――1
1話「島での生活と出会い」――――6
2話「対峙・英雄ガープ（前半）」――17
3話「対峙・英雄ガープ（後半）」――28
4話「海軍本部・マリンフォード到着」――35
5話「海軍本部の日常・前半」――43
6話「海軍本部の日常・後半」――53
7話「フーシャ村」――――――――65
＊＊話「黒獅子、その1」――――――76
8話「主人公達との出会い・前半」――82
9話「主人公達との出会い・後半」――93
10話「別れ」――――――――――106
＊＊話「黒獅子、その2」――――――121
11話「海兵としてのスタート」――129
12話「モモンガ中将」――――――138
13話「大将赤犬」――――――――149
14話「昇格と変態」――――――――157

0話「転生」

「んっ・・・ん・・・」

とりの囀りが聞こえ、まぶしい光が差し込む。

なんとか目を開け上体を起こす

「ここはどこだ・・?」

周りを一面見渡すと緑の自然とポツポツと果物も見え

遠くを見ると限りなく海が広がっている。

「どうなっているんだ・・・俺は夕ご飯を買いにスーパーに行ったんだ・・・

それからその帰り道に・・・そうだっ!!子供!!子供を庇ってトラックに

轢かれたんだっ!!でもここはどこかな・・・」

少し慌てつつもなんとか冷静に戻り辺りを見渡す

「ん・・・?」

足元に紙が落ちていた、それを広い上げ目を通す。

起きた君へ！
何が何だかわからないと思うからこの手紙を残すね！
まず、君は死にました！トラックに轢かれて・・・
でもその代わり庇った子供は無事だよ!!しかも君に助けてもらったことで
恩を感じたらしくて、将来お医者さんになるって張り切ってたよ！いいことしたね！
それで、君は僕の勝手で転生してもらった！
そこでどこに転生してもらおうか迷ったんだけど、君のメモリーを少し
覗かせてもらった！そこで僕は決めました。
君がよく読んでいた『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の世界にしようって!!
知らない世界よりはいいでしょ？ね？ね？
それで何も持たずだとすぐ死んじゃうかもだし子供を庇ったってことで
僕からいくつか特典をあげるね！

・1つ目は「身体能力のアップ」だよ！
前世のままだとすぐ死んじゃうからね！それでそっちでいう大将クラスくらいに

してあげようとしたら間違って大将の１０倍の強さにしちゃった！ごめんね☆
原作のキャラクター達には手加減してあげてね！腕っ節の強さはもちろん
速さも頑丈さも反映されるよ！

・２つ目は「覇気」だよ！
これがないと話にならないからね！もちろん「覇王色」もあるよ！
使えるようにはしてるけどコツとかはそっちで考えてね！すぐできると思うから。
これで並大抵のことじゃ死ななくなったね！

・３つ目は「悪魔の実」だよ！
これは僕も奮発しちゃった！君のためにオリジナルの実にしたよ？すごいでしょ？
その名も・・・・

『ヒトヒトの実　モデル～毘沙門天～』だよ！
これはもう負けはないね！最強クラスだ！神になっちゃうんだもん！
使い方はそっちに任せるね！

これくらいかな?それじゃあ楽しんでね~!!ばいばい!

・

・

・

あっ!そうだ、言わなきゃいけないことがあったんだ!

容姿のことなんだけど間違えてランダムにしちゃって!

『女の子』になっちゃった!ごめんね!

でも傾国の美女くらいにはしておいたから許してくれるよね?

手紙を読んだ主人公は、静かに手紙を半分に折り、自分の胸元を見る。

そして・・・・・

「ぎいいいいいいいいやあああああああああああああああああああああ!!!!!!!」

1話「島での生活と出会い」

あれから自分の身体を見て気絶したり、覇気を試して見たり、悪魔の実の能力を試してみたりした。

今の自分は小学生で言えば1年生くらいらしい、身体もぺったんこだしね！

覇気は今いる島の肉食動物達で試した、最初は死ぬかと思ったけど

操作できるようになれば、後は楽だった（最初覇王色を使ったときに島のいたるところで

動物達が倒れたり、海に住んでいる大きな蛇たち・・・なんだっけ、海王類だっけ・・？

も目を回して浮きあがってきたときはびっくりしたなんて言えない・・）

悪魔の実については・・・後で話そう・・

そんなこんなで私は今いる島で自給自足生活をしている

いろいろ調べてみて分かったことはここに人は住んでないらしい

「んしょ（ズズ）・・・っんしょ（ズズ）・・」

今何をしているかって？
今日のご飯は魚にしようと思って海で魚釣りしてきました！
竿は島にあった丈夫そうでも持てそうな木を手刀で切り落とし
海岸に流れてきてた布を糸代わりにしました！
針は石を覇気の篭った手で削って月の形にしました！
それで試しに釣ってみたら釣れました！
ちょっと大きいけどね・・・（海王類）

料理も前世じゃカップラーメンくらいしか作らなかったけど
今世じゃさすがにそんなものあるはずもなく・・・何日も失敗を続けながら
やっと魚を裁けるようになり、料理等もできるようになった！
調味料は海から塩を作れるし、甘いフルーツとかもあるからなんとかなる！
それでも前世は和食ばかり食べてたから、この世界でも和食が恋しくなり

いつも塩焼きにして食べてる。
たまにお刺身にしたいなーって思うけど調味料がなかなか・・・

「あっ・・そろそろくるかな・・?」
そうボk・・・もう身体も女だし「私」にするね?
私が料理をしているといつもご飯を食べにやってくる友達がいる
人がいない島に友達ができるわけないって?人間じゃないよ?

カサッ・・・カサカサッ・・・

「あっ・・きたみたい、ゲールー!ご飯できたよー」
草むらから出てきたのは、黒いライオンそれも普通の大きさではなく
大型トラック1台分ほどの大きさだ。
最初に出会った頃は敵意むき出しでいきなり襲いかかってきたりしたけど
今じゃすっかりライバル?友達?になった!
この世界の初めての友達だったからそれはそれは喜んだ、海王類を覇王色の覇気で
気絶させてそれをご馳走として一緒に食べたりもした。

それからご飯の時間になると、食べにきてくれる。
さすがに私一人じゃこの量食べきれないからね・・・
ご飯を食べているとゲールは「グゥゥ」と鳴きながら美味しそうに食べていた。
それを見て私はなんだか嬉しくなった。
ご飯を食べた後は、ゲールが座ったところに私が寝そべりゲールのたてがみを枕にして一緒にお昼寝をしてます！

そんなこんなで島で生活をするようになってから1年が経った
私の身体も少し大きくなった、髪も肩甲骨くらいまで伸びた。
切ろうとしたけどゲールに悲しい顔で「クゥゥン・・・」と悲しそうな声を出されたから
やめておいた・・・面倒なんだよ?重たいし、乾くまで時間かかるし・・・
シャンプーだってないから髪からまっちゃうし・・・
初めて身体を洗う時なんて洗うところが川くらいしかないからしょうがなく
服を脱ぎかけたときに「そういえば私女だった・・」なんてことを気づき

周りをゲールに見ていてもらい私は目隠しをしながら身体を洗った。
それがしばらく日課になった。
さすがに中身はまだ前世の男だった頃のものが残っているから
直視なんてできないよ！
ロリコンじゃあるまいし・・・

そんなことを毎日を過ごしていた・・・ある日私とゲールはいつもの日課である島のあちこちを散歩していた。
最近はゲールが背中に乗れと誘ってくれるからいつも乗って散歩してる。
いつもどおり散歩していると急にゲールが近くの海岸付近のほうを向き
牙をむき出しにしながら威嚇をしだした。
どうしたんだろう・・・と同じほうを向くと１つの船が見えた。
帆には『Ｍａｒｉｎｅｓ』と書かれた文字にカモメらしき鳥のマークが見えた
「あれは確か・・・海軍の旗・・だったような・・？とりあえず行ってみよう！」

とゲールに指示を出し、船のほうに向かって走り出した。

○ガープｓｉｄｅ
わしはおつるさんの船に乗せてもらいマリンフォードに向かう途中じゃ
センゴクのやつまた呼び出しおって・・・
というかわしが海兵達を残していった位であんなに怒らんでもいいだろうに・・
短期なやつじゃのう・・・

「ガープ、突っ立ってないで働いておくれよ」
「ガッハッハ!わしが手伝うと仕事が増えるぞ?おつるさんや」
「はぁ・・・これだから・・」
頭に手を添えながらため息をつく目の前の人物は
海軍本部中将の大参謀『つる』
わしやセンゴクと同期でだいぶ年も老いたがまだまだ現役じゃ!
おつるさんの船は特徴的で海兵が全員女だと言うことじゃ。

話を聞けば皆おつるさんを慕っていて目標にしているようだった。
海軍はほぼ男ばかりで女海兵達は肩身狭い思いをしているのもまた事実。
いつか変わるといいが・・・。

「結構進んだね、少し進んだら島があるはずだ、そこで一度休憩しようじゃないか」
「そうじゃのう、海兵のやつらも疲れがあるようじゃしのう・・・しかし
わしらがまだ平気だというに最近の若いやつらは・・・」
「そういうもんじゃないよ、ガープ。お前がおかしいだけだ」
「わしがおかしいか、そうかもしれないのう！」
他愛もない会話をしているとその島とやらに着いた。

乗組員の海兵たちは、船を止め海岸へ降りた。
それから海兵もゆっくりしだし、わしも船内に戻ろうとしたところ・・
――!!!!???
なんだ!?と思ったほうへ向いてみると乗ってきた船の半分ほどだがありえない大きさの

ライオンがき・・ん??
よく見てみると上に何かが乗っている。
ん??んんん???

「「こ、子供!!!!!?しかも女の子?!?!」」

海兵たちもびっくりしているようじゃ・・
そりゃびっくりするじゃろ・・・肉食動物の上に子供が乗ってればの・・

テクテクと此方へ歩いてくる、はて・・・ここは無人島のはずじゃったがの・・・

ライオンは威嚇をするようにキバをむき出しにしながら睨み付けてくるが
上の女の子は・・・笑っておる!?笑顔が可愛いのう・・ハッ!!!
だまされてはいけない！
「あのぉ～、あなた方は海軍様でしょうか・・？」
海の波音も感じさせない楽器のような声が響く・・・
ハッ!!ま、またぼーっとしてしもうた・・・

海兵たちには荷が重いかの・・・

「そうじゃ・・・わしはモンキー・D・ガープじゃ

こっちはおつるさんじゃ、そういうお前さんは誰じゃ・・?」

そう聞くと子供は目を大きく開く、少ししたらまた元の表情に戻った

「私は、ここの住んでるんです〜、そしてこのライオンはゲールって言って友達です!でも私に名前はないです・・好きに呼んでください〜」

わしは驚いた。こんな子がこんな危険だらけの島に一人ですんでおったとは・・

しかも女子じゃ・・見たところ年も二桁いっておらんようじゃ・・

どうやってすごしてきたんじゃ・・・

しかもその女の子が乗っているライオン・・・普通の大きさではないし

どうやら女の子を守るために、こちらを警戒しているようじゃ。

あのライオン東の海の海賊達以上の強さのようじゃ・・これは海兵達も

歯が立たないかもしれん・・。

しかし見たところホントにずっと過ごしてきたんじゃろう・・・着ている

ワンピース?はぼろぼろで所どころ破けておるし・・色も変色しておる・・

髪も元はきれいな赤色をしておるのじゃろう、それが今じゃぼさぼさじゃ。

顔は・・すべて整っておるのう・・将来は絶世の美女になるじゃろ・・・
だが・・・ここには風呂もないようじゃし・・川で水浴び程度か・・・
惜しいのう・・・わしには孫はおるが娘はおらん・・・こんな子じゃったら・・
しかし名前がないのか・・ということは捨てられたということか・・
そうガープは考えていると

「中将!この子どうなさいますか!?」
「とりあえず捕まえて話を聞こうか」
海兵とおつるさんが話を進めていた。

まぁしょうがないじゃろ・・・と女の子に近づく海兵たちを見る。
そして海兵たちが手を女の子へ近づけると・・・

――――　やめたほうがいいですよ～？（ニコッ

「「「ドサッ」」」

!!?海兵たちが倒れる・・・この震える感じ・・・覚えがあるっ!!

『覇王色の覇気』!!!!!!

２話「対峙・英雄ガープ（前半）」

○主人公ｓｉｄｅ

海兵さん達は私を捕まえようとしたらしい
私としては、『普通に』『穏便に』話をしたいんだけれど・・・
殺したくもないから・・・覇王色でいいかなぁ・・・

（（（（（ドンッ!!））））））

海兵たちは次から次へと倒れていく
ガープさんとおつるさんと他の幹部さんは目を大きく開いていた
（そりゃ驚くよね）

深いため息をつきつつも、ゲールを撫でながら前を向く
ゲールも威嚇していたものの撫でてあげたら気持ちようさそうに声をあげていた

そうしたら海軍の少し年の言った女性の人が話しかけてきた。
「おまえこの島で生活してるといったね?」
「そうですよ〜?もう何年になるんでしょうか・・日付がわからなくて・・
このライオンのゲールといつも一緒に生活してます〜、人間は私しかいませんけど」
「ふむ・・・そうか・・」

と女性は顎に手を当てながら何かを考えるようだった
(確か・・・この人・・『おつるさん』っていう人だったよね・・?
しかも悪魔の実の能力者だったような・・・なんだっけ?
ウオシュウオシュの実だっけ??シャンプーとかしてもらえないかな)

警戒する海兵たちをよそにそんなことを考える主人公である

「おつるさんあの子は覇王色の覇気を使うんじゃ、まともな子じゃまずない
ここはわしに任せてもらえんか!?」
「そんなこと言って本当は戦いたいだけじゃないだろうね?」
「ガッハッハ!ばれておったか、でもそれが一番じゃろ?それになわしの血が

滾るんじゃ!!」

そういうとガープは、手を腰に当て大声で笑いあげていた。

「まぁいいだろ・・・ガープ手加減はするんだよ?」

「おうっ!!」

そんな会話が目の前で繰り広げられていた

（なんかお笑い芸人みたい・・・）

気づいたときには私も笑顔になっていたことに気づいた

笑ったのなんて久しぶりだなっと考えていると・・・

「おいおぬし!!笑っておるとこ悪いんじゃが・・・わしと戦ってみんか!!」

――――　はっ!?えっ!?いきなり??英雄と戦うって?むりむり!しかも何その

満面の笑み！これは逃げられないかな・・でも

「いや！私は話をでｓ「ほら!!やるぞー！本気でかかってこんかぁぁい!!」・・
はい・・・」

もう仕方ないよね・・・
ため息をつく。
「はぁ・・仕方ないですね。それじゃガープさんでしたっけ・・？
お手合わせよろしくお願いします（ペコリ」
「ガッハッハ！幼いのに礼儀をわきまえとる！気に入った！
わしも少し本気を出してやろうっ！」
「はぁ・・それじゃ私も少し強めにいきますねっ!!」

――　二人は一斉に飛び出す
「行くぞ！小娘っ!!一撃で沈めてやるわいっ」「そんなこと言われずとも！」
二人の拳が黒に染まる

海兵幹部から「武装色の覇気ッ!!?」なんて声も聞こえたけど
今は目の前の敵に集中する!!

「愛あるゲンコツ・・・!!おぅりゃあぁぁぁ!!!」
「魔神・・・・拳ッ!!!!!」

・
・・
・・・
・・・・

――――　ドオオオオオオオオオオオオンッ!!!!

二人の拳がぶつかったとき、大地を吹き飛ばす程の衝撃を生む
大地は割れ、二人の周りにはクレーターを作り気絶した海兵は吹き飛ぶ。
だけどガープさんは笑みを絶やさず、私の拳を拳で受けていた。

「やりおるのぉ！小娘!!」
「あなたもっ！」
「それではこれはどうじゃ！おりゃりゃりゃりゃりゃ！」ダダダダダッ
「ハァァァァァァ！それそれ～！」バババババッ

と会話しつつお互い連続で拳を繰り出す、その速度は幹部たちにも見えず
おつるさんでもやっとのほどだ。
いつの間にか私も熱くなってきていた。

（本当に英雄だ！拳も重いし・・伊達にゲンコツのガープだなんて言われてないよね
しかもこの年だし若いときどれだけすごかったの!?）
そう考えていると不意に拳が飛んでくる

「戦闘中に考えごとなんぞしおって！余裕があるようじゃのう!!
どれちと本気を出してやろう・・・応ッ!!!!!」
その瞬間拳を黒くなり
先ほどとはありえない速さで飛んでくる拳、重さも桁違いになっていた

「っく・・・本当に手加減していたようですね・・・悲しくなります」
「ガッハッハ!!年は老いたが小娘にはまだ負けとらんわいっ!!」
「ふふ・・・そうですね、それじゃ私も本気を出しましょうか・・・」ブワッ
「ぬっ???」
「私・!!!!悪魔の実の能力者なんですよ?隠していてすみません・・・」

そう言うと身体のあちこちに変化が生まれる。
浅い綺麗な赤色をした髪の毛は深い黒赤色に染まり毛先はジリジリと赤い火が着き燃え盛る。
目も夕焼けのように金色の瞳が赤く染まり輝く。
身体の周りには黒い羽衣のような物を纏う。
他が見れば怪物、悪魔に見えるだろう

――　ヒトヒトの実、モデル『毘沙門天』
言わば『戦の神』ッ!!!!!

「申し訳ありませんが、まだ制御できていないんです・・・手加減はできません」
「ガッハッハ！わしも手加減されていたとはな！面白いッ！いくぞおぉぉぉお!!
小娘ぇぇぇぇぇッ!!!!!」
「拳・骨ッ!!!!応ッ!!!!」
「覇王・・・銃ッ!!!!」
(負けられないッ!!本気だぁぁぁぁッ!!!!)
ズガガガガガガガッヒュン・・・・ドバァァァァァン!!!!!!
拳が合わさる瞬間ガープは瞬時に避けた。
その瞬間主人公の手に纏った赤黒い覇気が大地を裂け、海を割り
遠くの見えた島が消え去った・・・
主人公は慌てた
(や、やっちゃった!!あそこまでするつもりはなかったのに!!あわわわわ
ど、どうしよおおおう・・・)

○つるｓｉｄｅ

あたしは悪夢を見てるのかい？目の前の年端も行かない子供が
互角にやりあってるなんて・・・いやあの子供もガープも本気出してないようだ
おや？これは悪い予感がするね・・子供もガープも本気でやるみたいなこと言ってるね
ガープは手に力を入れる・・・子供は・・んっ??

子供の様子がおかしいね、あれは・・悪魔の実だね・・
あんな子供が悪魔の実とは・・・実の能力がなくても手加減して中将、大将クラスの実力だというのに恐ろしい・・・あの子海軍にきてくれないかね。
女は少ない上に海軍だと下に見られてるからね、あんな子が着てくれたら見る目が変わるだろう・・

いやいや今は目の前の事をどうにしかしないと・・
子供のあれはなんだい？悪魔の姿・・？いや何かの化身かもしれないね。
超人（パラミニア）系かい？動物系にも見えるが、よくわからないがしかし『センゴク』のやつに少し
似てるかもしれない。

そう考えていると今まさにお互いぶつかり合う瞬間であった。
ッ!!?
!!ガープのやつがよけた??あのぶつかることが大好きのガープが？
その瞬間隣の島が一つ消えた。

ありえない・・こんな子供が古代兵器並の強さ・・・
敵になったら厄介だね。ガープのやつも青い顔をしているね、本当に厄介なんだろう

とりあえず止めるかね

「両方とも!!もうおやめ！」

3話「対峙・英雄ガープ（後半）」

○ガープｓｉｄｅ

危なかった・・・

わしが言ったとおり手加減してこの子の力を見るつもりじゃったが・・・

血が滾ってしまったのもあって本気の1発をお見舞いしようとしたが

まさかわしが避けるほどの力を持っておるとはのう・・・

一番驚いたのはこの力を持ちながらもまだ子供なことじゃ。

わしの孫達もずばぬけておるが、この子はさらに危険じゃのう

おつるさんが止めてくれんかったらただではすまなかったかもしれぬのう

じゃが・・・この娘っ子に親はおらんようじゃ・・・一人で力を磨いたとなると

びっくりじゃのう。

むぅ～・・・こんな子が娘になってくれればのう・・・これからの残った人生にも

楽しくなりそうなんじゃが・・・

おつるさんもまじめな顔をしておるが口先が上がりかけておるし同じことを

思っておるようじゃ、ちと踏み込んでみようかの

○主人公ｓｉｄｅ

つるさんの一言でお互いは攻撃をやめた。

あのままじゃお互い無事にすまなかったかもしれない・・・
よかったぁ～痛いのも嫌だし・・・ゲールも後ろで威嚇して今にも襲いかかりそうだから止めなきゃ行けなかったし・・・
悪魔の実の能力もまだ制御できてないから被害もどれくらい出るかわからないからね～

私は何も言わずゲールをなだめながらうんうんと頷く

「ところで・・・」

領いているとガープさんが声をかけてきた

「お前さんわし達とこんか?」

なんてお誘いを受けた

ガープさんの申し出にびっくりもしたが、ずっとこの無人島にいようとも思わなかったので嬉しい申し出だった。

つるさんも「ガープお前・・・」なんて言ってるけど笑っていたけど

なんで笑っているんだろう・・・いや!それよりもお誘いの話に返事しなきゃ!

「そうですね~、はい!お二人だったら海軍ですし、ずっとこの島にいようとも思わなかったのでよければお願いします(ペコリッ」

と返事をすると「そうかそうか!ガッハッハ」とガープさんは豪快に笑っていた。

つるさんもつるさんで「よろしく」と薄らと笑顔になっていた。

つるさんが笑顔になるとちょっと安心する・・なんて思ったり?

「そうじゃお前さんの名前どうするかのう・・・おつるさんいい名前ないか？
「そうだね・・・名前がないと不便だしね。んんー・・・そうだ
　レオナなんてどうだい？この子の容姿、育てば綺麗になりそうだし似合うだろ？」
「いい名前じゃ！じゃあわしは『モンキー・Ｄ』の名をやろう！お前さんは
　わしとおつるさんの娘じゃ!!」
「ガ、ガープ!?!!お前の娘は分かる！でもなんであたしまで!?」
「だっておつるさん子供いないじゃろ？子供を持って分かることもある
　子供はいいぞ？」
「あたしは、ただでさえ面倒事が嫌いなんだ。それなのにさらに娘までできたら・・・」
「いいじゃろ！この子には親がいないんじゃ！愛情を持って接してあげねば
　ならん！見ろ、服もボロボロで髪も元はきれいじゃったろうにボサボサに
　なってしまって・・・」
「ぐっ・・・」

　二人が会話しているのをじっと見る。

　私の親が「英雄ガープ」さんに「大参謀のつる」さん

楽しそうだなぁ・・・(にへら

「ほれ!!これからはお前さんの名前は『モンキー・D・レオナ』じゃ!!
そしてわしの事は「パパ」か「父さん」と呼べ!!」

ガープさんが「ほれほれ」と急かしてくる。

そ、そんな焦らさなくても・・・急に恥ずかしくなってきたなぁ・・
親が急にできるんだもん・・でも呼ばないわけにはいかないし。

レオナは意を決した。

レオナは頬を赤くし
レオナはガープの方を見上げ
レオナは目をうるうるとさせ
レオナは口を開くッ!!!

――――「パ・・・パパッ？」　ドンッ!!!!!

「ブハァァァァァァァァ!!!!!」とガープさんは言葉を残し倒れた。

そのままつるさんの方を向き
そのままの状態で口を開くッ!!

「あ、あたしはいいから!!ガープのやつだけで!!」

――――「ママ？」

おつるさんはそのまま固まｒ・・・石化した。

「あれ？私変なことしちゃったかな～・・・」

レオナは自分のしたことに気づかず笑顔で二人を見ていた・・・

４話「海軍本部・マリンフォード到着」

○レオナｓｉｄｅ

それならパパ、ママだと身が持たないと言われたため

ガープ父さん、つる母さんで決まった

今、私はガープ父さんと一緒につる母さんの海軍船に乗ってマリンフォードに着いたところです！

あれからしばらくしたら倒れたガープ父さんと石化したつる母さんが戻った

ガープ父さんは「父さん」って呼ぶといつものキリッとした顔が崩れてふにゃっとした笑顔でこちらを向いてくる

態度の変わりようが面白くて思わずこっちも吹いてしまう

つる母さんはまだ素っ気無いけど「母さん」と呼んでみると

頬を真っ赤にさせていた。嫌なのかなと思って「つるさん」って呼ぶと

悲しそうな顔をしていたのはなんでだろう？

それから気絶させていた海兵さんたちも起きた、私も謝った。
怒られることも覚悟していたものの、海兵さん達皆がみんな何故か笑顔で「いいよいいよ～」と言っていた。海兵さん優しくてよかった！

そして私はゲールを連れておつるさんの船に乗り込んだ！
ゲールは渋々としていたものの「じゃあここに残る・・？」と話すと物凄い勢いで首を横に振っていた。

マリンフォードは偉大なる航路（グランドライン）にある海軍本部だ
海軍基地があるのはもちろん正面には『正義の門』と呼ばれるものがありそこから世界政府直属の裁判所『エニエスロビー』や『世界一の大監獄・インペルダウン』に繋がっている。
他にも海兵達の家族が住む大きな街があったりする。

私はそんなところに言っていいの?と聞くと
ガープ父さんは「構わん!わしの娘なんじゃ、文句など言うやつがおるか!」
と笑っていた。
つるさんもウンウンと頷いていた。つるさんなんかイメージと段々
変わってきたような・・・
そんなこんなでマリンフォードに着いたのであった。

○海兵ｓｉｄｅ

ある日、いつものように俺達は訓練をしていた。
海軍の訓練はとてもキツイ、体力の向上を目的としたランニングはもちろん
普通の運動するのとは訳が違う。それになんと言っても幹部の方々は皆がみんな
厳しい・・・

それは分かる、民間人を守るのは海兵の仕事だからだ。
だが毎日これが続けば心が折れる者も出てくるのは当たり前だ。
この間スモーカー大佐殿のところに入ったたしぎさんという人も厳しいらしいが
どこか抜けているところがあって海兵たちの癒しになっているという話を聞いた
羨ましすぎる!!

そういうことで俺達は日々の安全のため日課である訓練を続けている
それがある日・・・

「船が見えましたッ!!!あれはつる中将殿の船です!
ガープ中将殿、つる中将殿が戻られました!」
と見張りの声が聞こえた。

そうだった・・・今日はお二人が戻られる日だった。
俺達にとってガープ中将は英雄だ。元は大将という座に昇格の話も会あったようだ
が断られたそうで、そのまま中将としてセンゴク元帥と共に
海賊王『ゴール・D・ロジャー』や金獅子の『シキ』と何度も渡り合ったという

逸話を残しているお方だ。
つる中将も海軍の大参謀と言われるお方だ。
若い頃のガープ中将やセンゴク元帥と共に生きてきた人で
他の海兵いわく苦労人らしい。

そのお二人共白髪が目立ち老いも進んできたというのに実力は未だに健在だ
そもそも将官クラスとなると俺達一般の海兵たちにとっては雲の上のような
存在だ。
そのお二人が帰ってくる

「全員！訓練をやめ！整列せよ!!」

上官の声がすると俺達は、一斉に船着場に向かい整列をし到着を待った。

「ガープ中将、つる中将到着ッ～～～!!!」

という上官の声と共に船から海兵たちが降りてくる。

俺達一般海兵たちは直属の部下でなければあまり見る事がない。
だから滅多に見れないチャンスでもある。

そして靴音を立て中将の二人が降りてきた
やはり威厳がある。敬礼をしながら二人の姿を見る。

そんなお二人の姿を見ているといつもと違う違和感を感じていた
何かが違うのだ。
周りを見ると他の海兵たち（上官を含め）はお二人の後ろを見て固まっていた。

何だ？と見てみると

普通ではありえないほどの大きな黒いライオンとその前を歩く年端もいかない少女が
笑顔で歩いていた。
笑顔が似合い、今は汚れが目立つが本来は非がないほどの美貌だということが分か

る。

この子が大人になったら周りの男達がほっとかなくなるなと思った。

女の子!?なぜ??

と考えていると目の前の少女は立ち止まった。

そしてくるりと俺達の方へ向くと

癒される笑顔を此方に向けながら

「私はモンキー・Ｄ・レオナです!!ガープ父さんとつる母さんの娘です!

よろしくお願いします～!（ニコッ」

「「「「「「「えぇ〜〜〜!!!!!!?」」」」」」」

そこでは、海兵たちの叫び声と野太い笑い声とため息を着く女性の声が響いていた・・

5話「海軍本部の日常・前半」

○レオナside

こんにちわ！レオナです。
マリンフォードについてから1年たちました！
私は船から降りて、数千人の海兵さん達に所々で挨拶をしながら二人についていきました
自己紹介した時海兵さん達は目を飛び出しながら驚いていました。
あれなんかまずかったかな・・・（前話参照）

なんて思ってたら後々おつるさん付きの海兵さんが教えてくれた
そうだよね・・・あのガープさんとつるさんの娘だなんて言えばそれは驚くよね・・
二人に後で謝ろうと思ったけど当人の二人は、笑顔で歩いていた

なんで!?まぁどっちみち謝ればいっか・・・と思い気にせず歩き続けた。
ちなみにゲールは、本部の近くの牧場?みたいなところにしばらくいてもらうことにしました。
大きいしみんな怖がっちゃうからね・・
別れるとき泣きそうな顔をして弱弱しい泣き声をしてたけど抱擁しながら
「絶対くるからね?次は一緒にいこうね?」って言ったら元気になったみたい。

それにしても海兵さん達の目が突き刺さる。背中にマントをしている人たちもいる・・あれは確か少尉以上の人が付けるんだよね・・?
それにしても付いていくのはいいけどどこに行くんだろう・・・
と思い聞いてみた。
「母さんこれどこに向かってるんですかー?」
「ガープのやつから聞いてなかったのかい?このままセングクのやつのところに行くよ、あれでも元帥なんだ。ガープや私と同期でガープよりはマシだね。お前さんのことも気にいってくれるかもしれないね」

確かセングク元帥ってあのアフロヘアーの人だったよね・・・

「仏のセングク」なんて呼ばれてたような名前に似合って
悪魔の実は『ヒトヒトの実・モデル大仏』だったような・・・
み、みてみたい!!!!!
こうはしてられない！ぜ、ぜひ頼んでみよう！（わくわく

こうしてレオナの楽しみが一つ増えた

・
・・
・・・
・・・・

それから私は海兵さん達に敬礼されながらもセンゴク元帥のいる本部に向かった

～本部・会議室前にて

「それじゃレオナ、入るよ?」

「はい～（ニコリッ」
「ガッハッハ！普通元帥に会うような時は幹部連中でも緊張するもんじゃがな！
さすがわしの娘！肝っ玉が据わっておるのう。わしに似てきたの！」
「やめてくれ、ガープ！レオナまでお前さんの悪い癖がついたらどうするのさ！
もうセンゴクのやつが待ってるから入るよ」コンコン
「センゴク失礼するよ」ガチャ

会議室の扉が開いた、その瞬間

「ガァァァァァァプッ!!!!!!
お前！また自分の海兵たちを置いていったな!?私のところまで苦情がきておる！
自分の海兵くらい自分で管理しろ！そしてつるさんにまで迷惑かけるな！」
「ガッハッハ！いいじゃろう、あいつらは自分のことは自分でなんとかなる！
おぉ！こんなところにわしの好きな焼き煎餅が・・・（バリバリ」
「お前えええええ!!!私がしゃべっとる時にイィィ!!!!!
こんなもの私がこうして食べてやるッ!!（バリバリバリ」
「あぁぁぁぁ!!!!!わしの煎餅！センゴクぅぅぅ!!何してくれとんじゃ!!!」

いきなり目の前のおじさん二人が漫ざ・・・じゃなくて喧嘩し始めた。
つる母さんの方を見たら『やれやれ』と言った顔をしていたので
今に始まったことじゃないのかな？原作でもよく喧嘩してたし・・・
でも見てて楽しいからいっか！
なんて思ってたら
「二人とも、そろそろいいかい？」
つるさんが止めに入ったようで、二人は不満気だったがこっちを向いた。

「コホンッ、この糞爺の話は後でするとしてつるさんよく帰ってきてくれた
今回は、長旅ご苦労だった。しばらく休んでくれ・・・
ところで・・・その後ろでニコニコしてる子供は誰だ？
外で海兵たちが騒いでおったのもその子か？」
「そうだよ、この子はレオナ。任務の帰り道に休憩がてら無人島に寄ったら
この子が住んでてね・・親がいないっていうから連れてきたのさ。
ほらレオナ挨拶しな」

「はい！私はモンキー・Ｄ・レオナです！名前は、つる母さんに
姓はガープ父さんにもらいました！よろしくお願いします、センゴクさん！（ニコッ」
「ほう・・・幼いのに礼儀がちゃんとしておるな・・珍しい子だ！
ハッハッハ・・・ハッ？　つる母さん？ガープ父さん??
ん・・・？えっ・・？えぇぇぇぇぇ!!??お前達いつ子供なんぞ作ったんだ!?
い、いつ結婚なんぞしたんだ！私は聞いてないぞ！」
「ったく・・こうなるのは分かってたけどね、センゴク落ち着きなよ
この子は親がいないからね・・あたし達が親代わりになることになったんだ」
「ガッハッハ！センゴクの焦った顔を見るのは久しぶりじゃのう！これは面白い！」
「（ピキッ　そうだったのか・・・それにしてもＤの名を・・・まぁいいだろう
つるさんにも認められるということは、いい子なのだろう。面倒はお前さん達で
見ろよ、それにしてもここに連れてくるということは海兵にするということか？
こんなに幼いのに・・・まだ早かろう？」
「最初はあたしもそう思ったんだけどね、その島でこの子とガープのやつが
１戦やりあったんだよ」
「なっ！こんな幼い子にまで手を出すとは、この爺は！」

私の他のメンバーが会話をしているのを私はジュースを飲みながら黙って聞いていた

途中で海兵の人に「何か飲む?」って言われたから持ってきてもらった!

冷たくておいしいなぁ・・・

ガープ父さんが会話に入ってないって?私の隣でどこからか持ってきた

煎餅を食べながら寝てるよ?器用だよね・・・

「それがねー・・あたしもこの馬鹿は、って最初は思ったんだけどね

実際やってみたらガープと互角にやりあうんだよ、覇気も使いこなしてね

力負けすると思ったら一歩も引かなくてね。それだけでも十分驚いたんだけど

この子悪魔の実を持ってるんだよ・・・しかもお前さんと同じく珍しいやつをね

いやお前さん以上かもしれない・・・。

悪魔の実を使った時の攻撃をあのガープが受けずに避けたんだ、あのガープがだよ?」

「なっ!あのガープがか!?そんな力をこの子が持っていると・・・

そうか・・それは敵に回したくないな・・・」

「それにね、この子は今の海軍の誰にも持っていない力がある」

「誰も持っていない力?なんだそれは!」
「それは・・・覇王色の覇気さ・・・しかも今の段階でコントロールもできてる」
「はっ?は、覇王色の覇気だと!!?しかもコントロールまで・・・
何者なのだ・・この子は・・」
「私も最初は、危険だと思ったんだけどね。ガープのやつが連れていくと行ったのと・・・まぁ、これは実際一緒に住んでれば分かるさ」

つるさんの言葉にセンゴクさんはキョトンとしていた。

その後も何か話をしていたけど軍の事についてみたいだったので私はジュースを飲んだり、海兵さんが持ってきてくれたお菓子を食べてくれた。
海兵さんに「ありがとう」と言ったら、顔を赤くして「いいんだよ!ゆっくり食べて!」
とニコニコして言ってくれた。
いつの間にか起きてたガープ父さんは鬼のような顔をしてたけどなぜ・・?
なんか怒らせちゃったのかな・・・

そんなこんなで話し合いは終わったらしくその日は、つるさんのところに泊まることになりました！ガープ父さんは「わしと一緒に寝るんじゃ！」って反論してたけど口はつるさんが勝ったみたいだ。

「それじゃいくよ」と言われて部屋を出るときに
ふと気がついてセンゴクさんの方へ向かい
「センゴクさん、ありがとうございました！あ、あとお父さんがごめんなさい
これから大変だとは思いますけどお世話になります！（ペコリ
私はまだ仕事のこととか分かりませんけど何かお手伝いできることが
あったら言ってください！」
と改めて御礼を言った。
センゴクさんは
「お、お前は・・分かってくれるのか・・・私の苦労が・・うぅッ
やっと今までの苦労を理解してくれる者を見つけた・・
ガープの娘だからと少し不安だったが、そんなことはなかったようだ・・
ありがとう・・いつでも遊びに来てくれて構わん！レオナ」
と泣きながら抱きつかれた。

本当に苦労してたんだな～と思ったレオナであった

6話「海軍本部の日常・後半」

○センゴクside

わたしは偉大なる航路にある海軍本部で元帥をしているセンゴクと言う。
今では元帥という階級には就いておるが、若い頃はガープやおつるさんと
いろんな海賊とやりあったもんだ。
もちろん海賊王ともな・・・。

あれから何年たったことか・・・
世界政府全軍総帥の『コング』さんから直接元帥になってほしいと言われてその
座についた。ガープのやつも大将へ昇進の話があったそうだが
「自由にやるにはこれ以上の地位はいらん!」とか言って断ったそうだ
あいつらしいといえばあいつらしいな。

今おつるさんは、ある任務で本部にはいない
それほど危ない任務ではないため、大丈夫だろう。
だが厄介なことにガープのやつが何も言わずついていったようだ・・。
あいつの自由奔放なところは多少あきらｍ・・ではなく黙認しておるが
自分の海兵たちに何も言わず出て行くやつがおるか・・。
帰ってきたら言ってやらねばな・・・っぐ・・胃がもたん！

それから1ヶ月ほどしておつるさん達が帰ってきたと伝令から報告があり
こちらに向かっているとのことで待っていた。
来るまで仕事を片付けることにした
・
・・
・・・

扉の外から言い争うような声がしてきた、おつるさんとガープのやつだな
まずはガープのやつに言ってやれねば・・・

ガチャと扉が開く

「ガァァァァァァプッ！貴様ッ！」

一室で怒声が響いた・・・。

あれからガープのやつが私の煎餅を勝手に食ったりそれを奪って全部食ってやったり

つるさんから任務の報告を受けた。
そこで私は一つのことに気づいた。
二人の後ろに小さい女の子がいる事に。
つるさんから紹介されたその女の子はニコニコとしていた。
話を聞けば無人島に一人でいたらしい、親もいないとは・・。
普通であれば心を閉ざしたり、悪い方向に出るはずなのだがこの子は
変わらず眩しいほどの愛嬌のある笑顔であった。

「私はモンキー・D・レオナです！名前は、つる母さんに
姓はガープ父さんにもらいました！よろしくお願いします、センゴクさん！」
とびっきりの笑顔を向けられた。夕日に照らせばきれいに輝くだろう赤い髪
大きくまん丸で金色に輝く目。
そして整っている顔だち、将来は誰もが振り向く美人になるだろう。
しかも礼儀を知ってるとは・・・今には大人にも負けないしっかりした
子だ・・・ん？んん??今この子はなんと言った？つる母さん？ガープ父さん？

・・・なんだとぉぉぉぉぉ!!!??

あまりの驚きに口からも出ていたようだ。
それよりもこやつらいつこんな子供を・・・というかいつ結婚したのだ
わしに一言も相談もなかったぞ？
と、二人にも問いかけたらどうやら誤解らしい
「この子は親がいないからね・・あたし達が親代わりになることになったんだ」
そうだったな、冷静に考えれば分かることだ。
少し冷静さを欠いていたようだ。

その後も驚きの連続だった。
まずガープと戦ったこと。まずガープのやつと戦うことは訓練であっても
手馴れの海兵たちでも恐怖するだろう。
しかも実力も申し分ないらしい。あのガープのやつが避けるほどの力を持つとは・・・
そしてこの子は能力者だという、しかも超人系かで私と同じ動物系の特殊なものらしい
気になるがそれはまた後で聞こう・・。
驚きの中で一番であったのが彼女が覇気を使えるということ。
しかも覇王色の覇気まで使えるという・・・恐ろしいことだ。
年端も行かない子供が、大人であっても何年長くて何十年かかって取得するものを
コントロールまでできるほどの使いだという。
覇王色の覇気については生まれ持ったものしか使えない、それも英雄クラス
白ひげのエドワード・ニューゲートや赤髪のシャンクスと言った
限られたものしか使えないものだ、それをこの子が・・・。
できれば敵には回したくないな・・と心の中で思った。

それからいろいろ話合って今日彼女は、おつるさんの家で一緒に泊まるようだ
ガープのやつが泣きながら抗議しておったが口では勝てんか・・・。
あれが親バカというやつなんだろうな。

それから3人を見送り仕事に戻ろうとしたが彼女が戻ってきた
そして・・・
「センゴクさん、ありがとうございました!あ、あとお父さんがごめんなさい
これから大変だとは思いますけどお世話になります!（ペコリ
私はまだ仕事のこととか分かりませんけど何かお手伝いできることが
あったら言ってください!」

わたしは衝撃を受けた。わたしの周りは個性的なものが多く中には仕事を増やし
胃が痛くなるほど厄介なものもいたりもするのだが。
この子はわたしの苦労を分かってくれるようだ、そう思ったら
涙が出てくる
ガープのやつが娘にしたということでまた個性的なものかと思ったが

彼女はどうやら違うようだ。

気づけばわたしは彼女を泣きながら抱擁していた。

その後「いつでも遊びにこい」と見送った。

その背中を見ながら

この子ならわたしの癒しになってくれる存在だろうと心に決めたセンゴクであった

○レオナｓｉｄｅ

センゴクさんと別れてからまっすぐつる母さんの家に向かった。

その後すぐつる母さんと夕飯を作って一緒に食べた

料理？もちろんできるよ！

島にいた頃やってたしフルーツとかで調味料まで作ったくらい

凝ってたよ！
腕もそれなりだと思うんだー
だけどまだ小さいのもあって好きに動けないから野菜の皮むきや、食器を
洗うというような雑用したよ！
味は美味しかった！なんだろう、一人じゃないっていうのもあるかなーって思う。
何より暖かかった、心もほっこりした。
その後つるさんが一緒に「お風呂に入ろう」と言ってきた。

あまり触れてないから忘れているかもしれないけど私は前世は男だったんだよ？
羞恥心もある、しかも年を重ねてるからって女性は女性だし・・・
一人で無人島にいた頃も自分の身体を見ようとも思わず服のまま川で汚れを落とした
り、用を足そうとした時もあまり見ないようにしてたくらいだった
どうにか一人で入ろうと頭をフル回転させて考えたけど何も浮かばず・・・
半ば引きずられながらお風呂場に向かった。
その時初めて自分の身体を見た。まだ小さいからか子供の身体で

胸も出てなかった・・・下はなかったけどね？
なんでこんなに冷静なのかというと、身体を見た時恥ずかしさより
本当に女になったんだっていう複雑な気持ちのほうが大きかったからだ
その時に悩みはしたけどもう諦めたというか吹っ切れた。
それから女性の裸を見ても多少は抵抗があるもののあまり気にならなくなった

お風呂から上がって脱衣所の鏡を見たらそこには美幼女がいて
思わず「だれ⁇」って言いかけた。
お風呂に入る前は、汚れで黒い赤色をしていて少しほつれている髪
顔や身体は少し黒ずんでいた
今はサラサラのストレートで輝かしいほどの赤い明るい髪
顔の汚れも取れてまん丸の目、整った顔だちがはっきり分かるようになった。
そして何よりちょうどいいくらいの白い肌、まったくの別人だった。

つるさんも私の代わりようを見て満足そうにしていた。
その後つるさんと少し無人島にいた頃のことを話したりした
それから寝ようという話になって寝室にいったらベッドはダブルベッドが一つだっ

た

「今日はここで寝るよ?」と言われつるさんに連れられてベッドに潜った。
久しぶりのふかふかベッドでもう少し起きていたかったけどあまりの
気持ちよさにすぐ寝ちゃった。

それから1週間ほどつる母さんとガープ父さんの家を交互に泊まったり
センゴクのおじさんの所へ遊びに行ったりした。

なんでセンゴクさんをおじさんなんて呼んでるかというと本人にそう呼んでほしいって
言われたからだ、初めて呼んだときセンゴクのおじさんは
満面の笑みで優しく頭を撫でてくれた!頭を撫でられるのって気持ちいいよね!

そんなある日・・・
ガープ父さんの家でいつもと変わらず読書をしていた。
父さんの家には書斎があって父さんが読まないため放置していたのを私が見つけた

好きにしていいぞと言われたからこうして毎日暇があれば呼んでいる
コミックにも出てた『うそつきノーランド』も置いてあった！
もちろん読んだよ？

それから読書を続けていたらガープ父さんが帰ってきた
そして「レオナちょっといいかのう」と呼ばれた。
何かなぁっと思っていたら
「明日からお前さんをわしの知り合いのところでしばらく住んでもらうぞ
そこにはわしの孫たちが折るから仲良くしてやってほしいんじゃ・・・
東の海にあるフーシャ村におるからそこに向かうぞ？
つるさんや、センゴクのやつには説教・・じゃなかった・・いろいろ
言われたが了解を取った。わしもお前さんと離れるのは嫌じゃが
今は気ままに生きてほしんじゃ・・・分かってくれるか？」
「うん～、父さんがそういうなら私そこ行きますよ～
それにしても父さんのお孫さんですかぁ・・どんな子なんでしょう・・」
「そうか・・行ってくれるか！何元気なところはわしに似ておる
お前さんも気に入るはずじゃ、それじゃ明日の昼には出るから準備は

しとくんじゃぞ?」

「はーい!」

私もフーシャ村に行くのかぁ・・・

確かあそこの後ろの山にはルフィやエース、サボが住んでるよね?

あの子たちと一緒に住むのかなぁ、仲良くできるかなぁ・・

でも楽しみだなぁ・・・

期待半分、不安半分で明日を待つレオナだった

7話「フーシャ村」

○レオナside

海軍本部を出てから父さんとその海兵さん達とで船を使って
フーシャ村へ向かいました
ゲールは、いつの間にか本部内にある牧場で仲良くなった動物がいるらしく
私が言って残ってもらった。泣きそうな顔をしていたけど
こればっかりはしょうがないと言い聞かせた。
ゲールの事は大事だけど島の頃とは違い今度は大勢の人たちも住んでいる。
大騒ぎになったらいけないからね・・
（本部でも大騒ぎだったけど・・・）
別れる時には、泣きながら抱き合った。
必ず帰ってくるからね！と言いその場は別れた・・・。（フラグじゃないよ？
はじめは私と父さんで向かうはずだったんだけど、センゴクさんに

前回無断で行った事の反省として連れていくことにしたみたい。
海兵さん達最初ちょっと拗ねてたし・・・
少し怖かったけど実際話してみたらニコッと笑って
話してくれた。みなさんすごい優しくてびっくりしたよ！

船に乗ってからいろいろあったなぁ・・・
ご飯の時間になった時食堂に行ってみたら海兵さん達が集まってて
聞いてみたらご飯作れる人がいなかったみたい・・・
お肉丸焼きにして食べようみたいなこと言ってて
さすがにこれから毎日お肉の丸焼きはさすがに辛いから
私が作るよーって言ったら海兵さん達が大声で驚いていた。
そんなに私って料理できそうに見えないかな・・・

なんて思いながらもその日は私が料理をした。
船で移動中だからそんなに贅沢な物できないけどね！

材料なんかは前世にあったものによく似てたから味見をしながら

作ってみた。
味も問題なかったから海兵さん達に出してみたら
みんな泣きながら食べてた。
みんなそろって
「「「うまぁぁあいぃぃぃぃ!!!!!」」」

なんて言われたから素直に嬉しかった！
でも父さんが海兵さん達のご飯まで食べてたから
少しお説教しました！その姿を見て海兵さんたちは青い顔してたけど・・・
それから毎日ご飯作らせてもらった。考えながら作るの楽しいよね！

後フーシャ村に向かってる途中に何回か海賊に遭遇したこともあった。
そんな時父さんが特製の砲弾をそのまま投げてた・・・
海兵さんは「いつものことだよ」と言ってた。
なんか面白そうだったから私もマネしてみようと思った
海兵さん達はあわあわと慌ててたけど大丈夫ですよといって
試してみたら、案外できるものでした！

それから父さんも私ができたことに気づいたらしくて
あれからどっちが何隻つぶせるか勝負することになった。
海兵さん達は泣きそうな顔で見ていた人もいたり、何人かで
賭けていた人もいた。
結果は、父さんの勝ちになった。
なったというのは、実際は私が1隻多かったのだけど私が勝ちとなると
父さんが拗ねるのでここは大人の対応ということで勝ちを譲った。
「惜しかったのう、ガッハッハ！」と笑う父さんに気づいていた海兵さん達が
哀れみの目で見ていた。

それから船に揺られて数日過ぎたらフーシャ村についた。
連絡はいっていたらしく村の人が出迎えてくれた

フーシャ村は東の海にあるゴア王国に属する村であまりの僻地にあるため王国中央
部から存在自体忘れられているほどである
そのゴア王国というのは東の海で一番美しい街と言われている。

しかし街の中心部は中流階級以上が暮らしておりその周りを高い壁で覆われている。その壁の外はスラム街のようになっており犯罪者や貧しい人々が暮らしている

船を降りると漫画で見たことがある人が向かってきた、確かあのめがねをかけて縞々の帽子を

被っているのはこの村の村長さんだったような・・

あ、あの後ろにいる女性は確か酒場の店主マキノさん！

すごい美人さんだー!!

「それじゃいくぞ、レオナ」

テンションが上がっていた私だったけど父さんの一言で戻った。

父さんが船を降りだしたので私もついていった。

「久しぶりだな、ガープよ」

「久しぶりですね！ガープさん！」

「そうじゃの、元気にしとったか？皆の集」

「今回はルフィ達の様子見か？」
「いやそれもあるが今回は別件じゃ。こいつをダダンのやつに預けようと思っての」
「はっ!?またか！って誰だその子は・・・」
「わしの娘じゃ！ほれ挨拶するんじゃ」

と私の背中に手を添えて前へ出した。
「わたくしの名前はモンキー・D・レオナと申します！ガープ父さんの娘をしています！
よろしくお願いします（ペコッ」
「あ、いえいえ・・これはご丁寧に・・・って
「「「「えええええええ!!!????」」」」

フーシャ村に驚きの声が響いた。
「が、ガープお前孫のルフィまでとは言わず娘までおったのか!?」
「そうじゃ！これがワシに似て少々抜けておるが幼いのにしっかりしておる。
ルフィやエースに見習ってほしいもんじゃ・・
さすがわしの娘!!ガッハッハ!!」
「お前さんに似てか・・・不安だ・・」

「それで、レオナちゃんはダダンさんの所でルフィ君達と暮らすってことでいいの？」
「その通りじゃ、マキノ。この子は幼いのに腕もたつし、家事も料理も
　申し分ない。一人で暮らすこともできるんじゃ、それで考えて
　ルフィ達の所でしばらく一緒にいてもらうことにしたんじゃ。」
「そうだったのか・・まぁお前が認めた子なら大丈夫なんじゃろ・・はぁ・・
　まぁレオナとやら、気をつけていくんじゃぞ」
「はい！ありがとうございます！（ニコッ」
「っぬ・・確かにあやつらとは少し違うようだな」
「だから言ったじゃろ！レオナは天才といっても過言じゃないんじゃ！
　料理も家事もできるんじゃから言うことなしじゃ！」
「娘自慢は分かった・・・それでコルボ山に向かわなくていいのか？
　もうすぐ日がくれるぞ」
「おお！そうじゃった、それじゃ向かうとするかの。
　レオナ行くぞ!!」
「はい～父さん（ニコッ」
「っぐ・・・やはり置いていくのはやめにしようかの・・・しかし・・
　ぐぬぬぬぬ」

父さんが何かうなっているけど、気にせずダダンさんのところに向かった。

コルボ山の中に一つの大きな屋敷があった、それなりにぼろぼろなところも見える。

近くに行くと男の人が二人と女性?が一人話してた。

父さんを見ると「フフン」と笑っていたのであれがダダンさんなんだと思う。

「おい、お前達!久しぶりじゃのう」

「あぁん?誰だ?あたしを誰かとしって・・・って・・ガープさん!!!??」

「が、ガープさんいつの間に!!??」

「それよりガープさん!そろそろあいつらをどうにかしておくれよ!手をつけられないようになっちまったよ!ルフィなんてエースのマネしたりまでするようになって・・・」

「ほう・・・ほんじゃあ一生豚箱で生きる道を選ぶか、あいつらと一緒にここで暮らすか選ばしてやる」

「「あいつらとここで暮らすことにします!ガープさん!!」」

「ならいい・・・」
「それで今日は何しにきたんだい?ガープさん」
「おう、そうじゃった。お前達にわしの娘を預けようとおもっての」
「はぁ!?娘?!また増えるっていうのかい!?もう嫌だよ!手もつけられない
　子供を相手にするのはホントに骨が折れるんだよ!?
　しかもあんたの子供っていうことは嫌な予感が・・・」
「子供は元気なのが一番じゃろ?まぁ・・こいつの場合は大丈夫じゃろ
　あいつらと違って幼いのに礼儀正しいし、家事も料理もできるんじゃ
　海兵達にも好かれとった、とりあえず挨拶じゃな、ほれレオナ」
　父さんに呼ばれたので挨拶をすることにした。
「わたくしモンキー・D・レオナと申します、今日からここで暮らすことになりました。
　お世話になる身ですのでご迷惑をかけないよう頑張りたいと思います!
　料理や家事等はできると思いますので必要であれば言ってください!」
「は、はぁ・・ご丁寧にこちらこそ・・・って、ええぇぇぇ!!??
　なんなんだい!この子は・・本当にお前さんの子かい!!??
　礼儀正しすぎやしないかい!どこかのお嬢様かと思ったよ!?」
「がっはっは!この子は天才だからな、さすがわしの娘だ!」

「はぁ・・とりあえず手のかからなそうな子で安心したよ・・・
それならまぁ一緒に住んでもらってもいいか・・・でも食料等は
自分で調達しなよ、寝どころくらいは用意してやる」
「はい～、ありがとうございますー！」
「これはこれで調子狂うね・・・」
「ほいじゃあレオナのことはよろしく頼むぞ、ダダン・・・
レオナも無茶するんじゃないぞ！」
「はい～！父さんも気をつけてくださいね！（ニコッ」
・
・・
・・・
「うわぁぁぁん！やっぱり娘と離れるのは嫌じゃぁぁぁぁ!!!!」
去ろうとした父さんは泣きながら私に抱きついてきた。
寂しいんだろうなぁ・・と思った・・私も寂しいしでもこのままじゃ
何も進まないから・・
頭を撫でながら

「父さん？しばらく離れるだけだよ？あのね・・私も寂しいけど
しょうがないんだよ？私と父さんで決めたことだから・・
父さん大好きだよ？」

「レオナぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
「父さぁぁぁぁん!!!!!!!」

ダダンの前では泣きながら抱き合う親娘の姿があった。

「もうどうにでもなれ・・・」
頭を抱えるダダンであった

＊＊話「黒獅子、その1」

俺は、ある島に住んでいるライオンだ。
他のライオン達とは大きさが倍近く異なり、体毛も黒で
覆われている。
そして動物達の中では王とも呼ばれている部類だ。
島に住んでいるモノたちにはルールがあり
その中でも代表的なのが
「敗者は勝者に抵抗しては行けない」
つまりは弱肉強食だということ。

肉食系の動物達には自分らのテリトリーがあり
日頃争っている。

俺達肉食系は襲われれば抵抗できるものの
草食系達は自分を守る術がない。

そのため草食系達は、肉食系と取引をする。
俺達は草食系から情報等をもらい、逆に草食系達を俺達の
テリトリーに住まわせている。
俺達ライオンは力はあるが数が少ない。
そのため最近クマとチーター共が手を組み、
俺達のテリトリーを奪っていった。
数は暴力とよく言ったものだ。
それから仲間と散り散りになってしまい俺は、
１匹さまよっていた。
草食たちに手を出せば取引をしている肉食たちが黙っていないだろう
空腹も限界が来ようとし、眩暈を時々させながら歩いていたら
ふと肉の匂いがしてきた。生きている動物の匂いではなく
食欲をそそるような匂いだ。
試しに行ってみようと匂いに釣られ言ってみれば
そこには人間がいた、しかも小さい子供のようだ。
その子供は、どこからか持ってきた巨大な肉を木に突き刺し焼いていた。
運良く子供の背後に出てきたようだ。

何故子供がこんな所にと疑問を持ったが抑えきれない
空腹に消えた。
絶好のチャンスだ、と隠れていた草むらから
静かに一歩足を出した。

その時、肉を見ていた子供が急にこちらを向いた。
そして笑顔で「ライオンさん迷子なの？一緒に食べる？」

俺は心底驚いた。子供の言っている言葉が理解できたのだ。
そして何より一緒に食べようと誘ってきたのだ。
この島で食料という物は、貴重なもので同じ種族であっても
自分の子供でなければ分け与えないほどだ。
そんな食料を一緒に食べようと目の前の子供は言っている。
罠だと思い、威嚇を飛ばすも子供には効果はないらしく
「もうしょうがないなぁ」と言い、自分の分のを切り
残りの全ての肉を俺の目の前に置いたのだ。
子供は何も言わず木株に座り食べ始めた。

恐る恐る目の前の肉にかぶりつく。
それはとても温かかった。肉はもちろん、これは
この子供からもらったものだからなのだなと
実感した。一口食べ害がないと分かると一心不乱に
かぶりついた。
そんな中いつの間にか子供は俺の近くに来ていた。
何をするつもりだと見ていると俺の顔の毛に触り始めた
目を輝かせ「もふもふ～」と興奮しているようだった。
そんな子供を無視し肉を食べた。
肉を食べ終わり、そういえばと子供のほうを見ると
俺の身体を枕にし、顔の毛を身体にかけ寝ていた。
俺は仲間達がいても妻がいなかった。
しかしこの寝顔を見たら、子供を作っておけばよかったと
後悔した・・。
その後俺も食後ということがあって一緒に寝た。

それから１度別れ子供に「またきてねー！一緒に

食べよー！」と言われたため次の日本当にいるのかと顔を出してみれば・・・いた。しかも昨日より肉が大きくなっていた。
そして笑顔で迎えられ一緒に食べた。
食事の最中子供は何かを考えているようだった。
俺は優しく声を挙げるとこはにっこり笑い
「ううん、実は名前を考えてたんだー。ライオン君って呼びづらいからね！考えてみたんだけど、ゲールなんてどうかな！」
俺は感動した！俺に名前をくれるというのだ。
しかも真剣に考えてくれたことが一番嬉しかった。
嬉しくて子供の顔を舐めまわしてやった。
「キャー」と叫んでいたが変わらず笑顔で嬉しそうだった
よし！俺は今日からゲールだ！
聞けば子供は名前がないらしい
だから俺は子供をお嬢と呼ぶことにした。
なんで女か分かるかって？
お嬢が口に時々出してたからさ。
それからだ、初めは警戒したものの今では子供の前では

安心できるほどになっていた。
朝には1度別れるものの昼には一緒になり、子供を背中に乗せ散歩したりした。私は本当に楽しかった。
居場所を奪われ、仲間とちりじりにされ
飢え死にしそうになったところを子供に救われた。

これが俺と子供の出会いだった

8話「主人公達との出会い・前半」

○レオナｓｉｄｅ

私と父さんはあれから別れた。
父さんと泣きあった時の事を思い出したら顔が熱くなった。
帰り際ダダンさんに「あいつらを立派な海兵に育てるんじゃぞ～」と言って
姿が見えなくなると「山賊が海兵を育ててどうすんだ！」とツッコミを入れていた。

ダダンさんに家のルールを聞かされ、今は森を歩いて海に向かっている。
ご飯の食材を集めるためだ！

ダダンさんの手下さん達は明るくて優しい人ばかりだった。
本当に山賊かと疑っちゃったなんて言えない・・・
ルフィたちはいつもお昼は森の方で好き勝手しているらしい

夜になれば会えるだろうと思い、今は食材集めだ。
初めてのダダンさん達との食事だから少し奮発しようと思って
魚を取りにきたのだ。

それから歩いて海に着いた。私の今の服は白のノースリーブにホットパンツ
そしてサンダルというラフな格好だ。
このままでは、せっかく着ていた服がぬれてしまうため
私は上を脱ぎ、胸元をサラシを巻いただけの上半身裸の状態になった。
下はホットパンツのままだよ?さすがにパンツ一枚は人目がないにしろ
恥ずかしいし・・・。

え?サラシなんで巻いてるのかって??
少し前から胸が育ち始めたからだ・・・。しかもそれを気づいたのが
母さんとお風呂を入るときだった。
もちろん母さんにばれちゃってすごいはしゃいでいてその日は
いつもよりご飯が豪勢だった。
でも恥ずかしさの気持ちが強くてその日はご飯が喉に通らなかった。

それから母さんに「今後のためにもブラをつけよう」と言われ
全力で拒否した、それでもと母さんが強要してくるが
さすがにと思い負けじと抵抗し決着がつかなかった。
だがそれから少しずつ大きくなると無視できなくなってきた。
擦れると痛みがきて少し重量感も感じられる。
どうしようかと思った時閃いたのがサラシを巻くことにした。
結構きつめに巻けば窮屈だけど、ある程度胸も小さく収まり揺れる感じもしない。

それから海岸まで来ると私は見聞色の覇気を使い、海の中にいる魚達の中から
できるだけ大きい魚を見つけ、覇王色の覇気をぶつけた。

私の覇気に耐え切れなくなった魚は目を回しながら海面に浮いてきた。
そのまま波で海岸まで流され私の元までやってきた。
それを近くにあった丈夫な木を見つけ魚の頭に突き刺し、肩に背負い
ダダンさんの家に帰った。
帰り道は特に何もなく、無事家に着いたけどダダンさん達と会ったら

叫び声をあげながら気絶した。
私の背負ってた魚にびっくりしたんだと思う。大きさは海王類には届かないくらいだけど家よりは大きいくらいだった。
気絶したダダンさんや山賊さんを家の中で横にして私は魚の料理を始めることにした。

・
・・
・・・

それから魚を裁き今日くらいはそのままの味を生かそうということでいわゆるマンガ肉というやつにしてみた。味は私が作り持ってきた調味料を少し加えた。

日が暮れてくると気絶していたダダンさん達が起きてきたらしく
私の料理したマンガ肉の山を見た瞬間、今にも飛び掛りそうなほど興奮していた。
ダダンさんも目を大きく開いていたから驚いてたんだと思う。

そんな様子を見ていたらちょうどいいタイミングで外から子供の声がしてきた。
どうやらルフィ達が帰ってきたようだ。
ダダンさんに「食事の前にお前をあいつらに紹介するからね」と言われた。

いよいよご対面!!

「ルフィ、エース、サボ今日から家で暮らすことになったレオナだ。
仲良くしてやってくれよ」
とダダンさんに紹介してもらった。
ルフィは「よろしくな!」と笑顔で
エースはぶっきらぼうな顔で
サボも警戒しているようだった。

正直言おう・・・この子達可愛すぎるッ!!
前世でもアニメを見ていた時に子供の頃のルフィ達を見た事がある
その時も愛嬌のある感じで可愛いと思っていた。

実際見てみると何倍も可愛いと思ってしまった。

「ルフィくん、エースくん、サボくんよろしくね！（ニコッ」

と言うとエースくんとサボくんは表情は変わらず警戒していたものの頬を赤くし目をそらしていた。

・・・どうして？

ルフィくんは笑顔で「よろしくな！」と言っていた、可愛い。

それから食事になりダダンさんが「今日の食事はレオナが自分で魚を捕まえてきて料理してくれたんだ」と肉の山を指指した。

その時3人とも目を輝かせよだれを垂らしながら

「「これ食べていいのかっ!?」」と興奮していた。

それから全員でお肉を食べた。食事というよりお肉の奪い合いになっていた。

ダダンさんは離れでお酒を飲んでいたのであらかじめ作っておいた。

つまみを出した。

「気がきくじゃないか」とダダンさんにお礼を言われた時は嬉しかった。

それからしばらくお祭り?状態が続きお肉がなくなった頃には夜中になっていた。
その後に「今日は料理を作ってもらったお礼だ」と一番にお風呂に入れてもらった。
この家に着て始めてのお風呂だったけどすごく気持ちよかった。
入る前にエース君達に一緒に入る?と聞いたら顔を真っ赤にしながら断られた
ルフィ君は「入る〜!」と私に付いてきたけどエース君とサボ君に止められていた。

私の身体は今女だけど相手はまだ子供だから恥ずかしくないよ?

それからお風呂も終わって寝るとなったときに私はどうしようかと迷っていたら
ルフィ君に「一緒に寝よう!」と言われそのまま一緒に寝る事になった。
エース君とサボ君は納得してないようだったけど・・。

その日はぐっすり寝て次の日になった。
ルフィ君達はまだ寝ていたけど私は早起きが癖になっていたから

そのまま起きて朝ご飯の準備をした。
朝のご飯は魚と家の倉庫に置いてあった野菜類を使い食べやすいように鍋にした。
もちろん野菜はダダンさんに使っていいって言われたよ?
朝ごはんを作り終わると匂いに釣られたようでルフィ君達が起きてきた。
「今日は鍋だよ〜」と3人に言うと眠そうな目を輝かせお腹を『ぐぅ〜』と鳴らしていたのを聞いて私は耐えられず笑ってしまった。
ルフィ君は人懐っこいところがありよく接してくれるけど
エース君とサボ君はまだ警戒心があるようだった。

食事が終わると、3人が私に話しかけてきた。
「今日、お前どうすんだ」とエース君から始めて声をかけられた。
「私はお昼ご飯の事もあるから熊でも見つけようかと思ってるよ〜?」
「「熊ッ!!??」」
えっ・・なんで??何がおかしいの・・?山賊の人まで驚いてるし・・
「そ、そうか・・なら俺達も今日はついていってもいいか?」

「え？いいけど・・面白いことないよ～・・？」
「それでもいいぜ」
と言っていたので今日は私＋3人で行動することになった。
私達は熊を見つけるため森に入った。
エース君達は手にどこからか持ってきた鉄パイプを装備していた。
ルフィ君も持っていたけどまだ能力を制御できてないのかな・・と一人納得することにした。
熊を見つけるまでエース君達の他愛ない話を聞いたり、私の事を話したりした。
私がガープ父さんの娘だと言ったときは目を飛び出しながら驚いていた。
ルフィ君からは「俺の姉ちゃんだったんだなー！これから姉ちゃんって呼ぶ！」と言っていた。
それから2時間ほど歩いていると見つけた。

結構な大きさだが熊だった。

3人にも教えたら緊張しているようだった。

エース君に「本当にやるのか？」と聞かれたから

「うん！今日のご飯だもん」

と伝えたらなんとも言えない顔になっていた。

それから「ここで待っててね」と伝え私は隠れていた草むらを飛び出した。

3人は急に飛び出した私に驚いていた。

熊は私に気づき雄たけびを上げ威嚇してきた。

それでも私に効くはずもなく、私はいつも通り覇王色の覇気をぶつける。

すると身体をガクガクと震わせながら泡を吹き倒れる。

3人の方を見るとポカーンとしており「終わったよ？」と伝えると

我に返ったらしく「「ハァッ???!!!」」

と案の定驚いていた。

何をしたのか聞かれたので「内緒♬」と言っておいた。
そして熊の足を持ち引きずり家に帰ることにした。

その引きずっている時も3人ともポカーンとしたままだった・・・

――――――　後半へ続きます

9話「主人公達との出会い・後半」

○レオナside

驚きすぎて魂が抜けかけている3人を気にかけながら
私は熊を引きずり家に帰った。
ダダンさんや山賊さん達は熊を見た瞬間「ぎゃぁぁぁぁ!!」と叫んでいた。
今日のご飯ですよ!と言うと顔を青ざめていたような気がした。

それからいつも通り私は熊を捌いてご飯の材料にした。
そう昨日のご飯の時にダダンさんから料理係を頼まれた。
海兵さん達と同じでここも料理を作る人がいなかったらしい。
放って置くと毎日マンガ肉になってしまうので引き受けた。
私自身も料理を作るのが楽しくなっていたため嫌な思いは何もしなかった。
それが日課になった・・・

それから数日過ぎたある日・・・
「おいお前！少し話がある」
とエースとサボに呼ばれた。
「ついてこい」と言われ山の中を歩きついていくと
ある程度広い、平地のようなところに出た。
そこにはルフィもいたようだ。

「それでお話ってなにかなぁ？」
「お前女の癖に強いみたいだからな、俺たちと勝負しろ！」
「え・・・？」
「だから!!俺たちと勝負しろ!!」

まさかのまさかで勝負を挑まれました。
サボくんは「よっしゃ！」と意気込んでるし
エースくんはなんか言ってやったみたいな顔してるし・・・

ルフィくんは・・・きゃっきゃして可愛いし・・・

まぁ誘われたってことだし少し遊んでみよっかなぁ

というわけで

「いいよ～それでどうするのー？一人ずつやるー？それとも全員でくるー？」

「どうやら俺達を甘く見てるようだな・・・もちろん！一人ずつだ！」

「わかった～順番はそっちが決めてねー？」

「「俺が一番だっ!!!」」

見事に3人ハモりました。

・

・・

・・・

只今私ことレオナは、芝の上に座り3人を見てます

どうやら誰が一番先にやるかモメてるみたい・・・。

エ「俺が一番先にやる!!」

サ「だめだ！俺が一番でいいだろ！」
ル「なんでだよ！俺にもやらせてくれよ！」
エ「俺が一番年上なんだ！年上を尊重しろよ!!」
サ「うっわ！卑怯だぞエース!!年なんて出してきて！」
ル「そうだぞ！そんなことより俺もやりたい!!」

さっきからこれを繰り返しで聞いてる・・
まったくもう・・

「あのさ・・・」

「「なんだっ!!」」

「ずーっと待ってるんだけど・・明日になっちゃうよー・・
もうさとりあえずルフィ君、サボ君、エース君の順番でよくないかな？
年の低い方からでいいでしょ？楽しそうだし！」
「そうだな・・このまま言い争うってもしょうがないしお前の言うとおりに

してやる」

私の提案で３人共了承したようだ。

１回戦　レオナｖｓルフィ　Ｆｉｇｈｔ!!!

「姉ちゃんいくぞー!!」

「どこからでもおいで～ルフィ君」

私は構えず仁王立ちの状態、ルフィ君は構える。

動いたのはルフィ君。

「ゴムゴムの～・・・ピストルッ!!」

ルフィ君の十八番が！と私は表には出さなかったけど

内心すごいわくわくした！

くるっ！と思ったけど私の顔の真横ルフィ君の伸びた腕が

通り過ぎ、伸びきったところで戻っていった。

次がくるのかなと思っていると伸びた腕の反動で、ルフィ君が
「うわぁぁぁあ～！」という叫び声と共に後ろに吹っ飛んでいった。
私はぽかんとしていたが、エース君とサボ君はお腹を抱えて笑っていた。

飛んでいったルフィ君は目を回していたようで私の不戦勝になったみたい・・・。
＊レオナｗｉｎ

２回戦　レオナｖｓサボ　Ｆｉｇｈｔ!!
「次は俺だな！ルフィのようには行かないぜ！」
「私何もしてないんだけど・・・」
なんか勝手に始まった・・・。

サボ君は、両手を構えた。
いつも持ってる鉄パイプを使わないみたいだ。
そんなことを考えているとサボ君がこちらに向かって走り出した。

私も構える。
サボ君が拳を繰り出す・・
「はっ!!」
私はそれをひらりと軽くかわす。
それを気にせず何度も何度も繰り出すが私もそれを軽くかわす
「はぁ・・・はぁ・・・」
サボ君は息を切らしていた、体力が尽きてきたかな?
私は出ることにした。
そうだ・・あれを使おう・・
「じゃあサボ君今度はこっちの番だね!いくよ〜」
「ッ!!」
私は地面を軽くトンッと蹴り一瞬にしてサボ君に詰め寄る。
サボ君は驚き反応できていなかった
「父さん直伝!拳〜骨〜そーれ!!」ゴンッ
「ぎゃぁぁぁぁ!」
私は軽くサボ君の頭に拳をおろした。

サボ君はそのまま地面に横たわり、気絶した。
あれれ・・軽くやったんだけどな・・・
いつの間にか起きていたルフィ君とエース君は青い顔をして
「じ、じいちゃん（じじい）の・・・」と身体を震わせていた。

父さん子供達に何してるの・・・

そして「ようやく俺の出番だな！」

３回戦　レオナｖｓエース　ｆｉｇｈｔ！
エース君は鉄パイプを片手にこちらに向かって走ってきた。
私に向かい鉄パイプを振り下ろした。

エース君私じゃなかったら死んでたよ・・？
なんて思いながら避ける。
エース君は止まらず縦に振り下ろしそのまま横になぎ払う。

どうやら本気のようだ・・・。

なら私もそれに答えなくちゃ！とやる気を出す。
それから何度も何度も鉄パイプを振りかぶってくるがそれでも私は
避け続ける。

「このっ！なんで当たらないんだ！」
「エース君振りかぶるのはいいけど、大きく振りかぶりすぎて隙だらけだよ？
普通の人はよけられないと思うけどある程度実力がある人には意味ないよー？
後本当に私を倒したいなら全部を利用しなきゃ物、自分の身体、自然もそうだし・・
足技だけでも組み合わせればもっとよくなると思うよ」
「っく！これだけやっても余裕なのか・・・くそっ！俺は強くならなきゃ
いけないんだ!!」
「何がエース君を動かしているのか分からないけれど・・・気持ちに左右されすぎ
ているよ？焦ったらその分だけ隙出ちゃうし・・・」
「俺は・・・守らなきゃいけねえ！ルフィやサボ達を!!」
「そう・・・そういう思いがあったんだね・・ならこの勝負私も本気で受けることに

する！いくよ!!エース君！」
「っく!!」
エース君は、鉄パイプを盾にし、前に構えた。
私はそれを気にもせず鉄パイプに向かい拳を繰り出す
「覇王拳ッ！ハァー!!」ドゴッ

私の繰り出した拳は、鉄パイプを折り曲げそのままエース君をも吹き飛ばした。
ちなみにちゃんと手加減はしたよ？本気出したらどうなるかわからないから・・

吹き飛んでダメージを受けたはずのエース君は「ゴホッ！ゴホッ！」と咽ながらも立ち上がろうとしていた。
私はエース君の前に出た
「エース君、私の勝ちだよね。」
「まだ・・ま、まだ・・」
「もうやめよう、今の状態でやっても結果は見えてるよ？
それより私に一つ提案があるんだけど聞く？」
「ぜぇ・・ぜぇ・・・なんだ」

「私に教わってみる気はない？教えられる事はそんなにないけど欠点を治す
事くらいはできると思うし、ルフィ君やサボ君を守るならいい提案だと思うんだけど
どう？」
「しょ、しょうがねえ・・まだ腑に落ちないことはあるが、その提案受けるッ！」
「わかった、ルフィ君とサボ君はどうするー？」
「「俺達もするっ！」」
「そっか・・それじゃあ今日はとりあえず帰ろ？日が沈んできたし
3人とも傷だらけなんだから、ね？」
「「わかった」」

そうして3人と一緒に帰ろうとしたその時エース君に呼び止められた。
「ルフィ、サボ先にあるいててくれ。俺はちょっとこいつに話がある。」
「「わかった」」
と言い私達二人を残し歩いていった。

しばらく沈黙が続き・・・エース君が口を開く。
エース君は手を力いっぱい握り身体は震えていた

「もし・・・もしも俺が海賊王の息子だって言ったらお前はどう思う」
「海賊王ってゴール・D・ロジャーさんだっけ?」
「そうだ、そいつだ」
「うーん・・・そうだね〜・・・エース君が誰の子であってもエース君はエース君でしょー?私は気にしないよー?」
と正直な気持ちを伝えるとエース君は口を噛みしめた。
泣くのを我慢しているようだった。
それはそうのはず・・・私はアニメやマンガで読んだけど
エース君は海賊王の子供だと言う事でそれなりの対応を受けていたらしい
それは親を恨んだり心を閉ざしたりするはず。

私は身体を震わせたっているエース君の前に行き抱擁した
「エース君、我慢しないで泣きたい時は泣いてもいいんだよ?
誰にも言わないから、ね?言いづらいことを私に言ってくれてありがとう!」
「うわぁぁぁぁぁん!」

と私の腕の中でエース君は号泣した。

それからしばらくするとエース君は泣きやみ顔を真っ赤にさせて
「いいか!絶対言うなよ!」と約束させられた。
私はエース君に「じゃあ私の事をお姉ちゃんって呼んで?」と言ったら
再び顔を真っ赤にさせて「はぁっ!??なんで俺が・・・」と言っていたものの
おどs・・じゃなくてお話して『姉貴』と呼ぶ事で妥協した。
試しに呼んでみて!と私はお願いすると顔を真っ赤にさせてぶっきら棒に
「あ、姉貴・・・」と呼んでくれた

そんなエース君を私は可愛いながら我慢できずにハグした。

１０話「別れ」

○エースｓｉｄｅ

俺は父親を憎んでいる。
聞いた話だと俺は一人だった所をガープのじじいに拾われたらしい。

赤ん坊の頃のことなんか何も覚えちゃいない。
物心ついた頃にはダダンの所に住んでたんだ。

今もそうだが、あの頃の俺は荒んでたと思う。
心を閉ざして誰とも関わらないようにしていた。
ダダンの家に居るのはお風呂、ご飯、寝る時くらいだ
それ以外は森の中で動いている。

だがあれからサボやルフィ達に会った。

サボとは初めダダン家の近くにあるゴミ山で会ったんだ
なんだかんだ喧嘩はしたが今は一緒に行動している。
サボはどっかの貴族らしい・・・。
正直どうでもいいが・・・

ルフィのやつはガープのじじいが連れてきた。
初めは俺の後を嫌というほどくっついてきた
あの時の事は反省しているが、俺は逆に離そうとしていた。
俺が走ればルフィも走り追ってくる。

そんなことが何度か続き、ある時俺とサボの秘密基地までついてくるようになった。
サボと相談している時に「いっそ殺すか」と話すとルフィは聞いていたらしく
号泣しながら叫んでいた。
あの時止めるのは大変だった・・・。

俺がルフィを認めたのはあの時だったな・・
いつも通りルフィが俺達の後についてきて少し目を離したら

森の奥の方から話し声が聞こえたんだ、それも争っているような声
サボを呼び忍び足で向かってみるとルフィが海賊に捕まっていた。
どうやら俺を探しているらしくルフィに問いただしているところだった。
だがあいつは口を割らなかった、どんなに痛めつけられてもだ。

そんなあいつだからこそ認めたんだろうな・・・。
もちろんその後はルフィを助けたさ

その後は3人で行動するようになり義兄弟の杯も交わした。
大人になったら俺達は3人とも海賊として海に出るという約束をし日々
鍛えるようになっていった。

だがそんなある日・・・レオナという女がやってきた。
初めて会ったのは俺達が3人でやっていた修行から帰ってきたときだ。
違和感に気づいたのはダダンの家の前にやってきたところだ。
すごくいい匂いがした、空腹を誘うような・・・

それに誘われるように入ってみると
俺達と同じか少し上くらいの女が料理をしていた。
それもかなりの腕のようだ。

ダダンのやつからレオナの紹介をされた。
ルフィの奴は相変わらず警戒心もなく笑って接していた。
俺とサボは頷き警戒をする。

そうしているとレオナが俺達の前にきて「よろしくねっ」と笑顔で言ってきた。
か、かわいい・・・なんて思っていない!!な、ないんだ・・。
サボを見てみると鼻の下を伸ばしていた。こいつ・・・。

俺達は同い年の女なんていなかったからどうすればいいかなんて分かるはずもなく・・
風呂の時なんて一緒に入らないかなんて聞いてきた。
こいつ・・俺達が男だって分かってるのか・・？
もちろん断ったがルフィの奴は迷うことなく入ろうとしていたので俺達が

止めた。
レオナのがっかりしていたが、気にしないことにする。
こいつは抜けている所がある・・だが優しいというのは変わりないようだ。
だが・・もしも俺の『あれ』を知ったらどうするか・・・いつかは言うんだろうな

それから何日もたち、俺達は相談してレオナのやつと手合わせすることにした。
あいつ俺達の前で熊を触りもせずに倒したんだぜ？初めて会った日もでっかい魚を料理してたしな。
俺達がどれくらい強いか知るチャンスでもある。

それからレオナに手合わせを申し込み俺達は森の広場のようなところにやってきた。
ここなら充分動けるだろう。

多少順番を争ったがルフィ、サボ、オレの順になった。

結果は・・・ルフィは自滅、サボは・・・ゲンコツを食らって気絶
オレは、鉄パイプを折られそのまま吹き飛ばされた。
完敗だった。
試合中あいつが俺の動き方にあれこれ言ってきて頭に血が昇っていた。
でも今考えればその通りだったと思う。
俺達と同い年で女のこいつに俺達は手も足も出なかった。

悔しかった、悔しすぎて吐きそうになるくらいに。

そこにあいつがきて俺達に提案してきた。
俺達を鍛えてくれると何故そんなことを聞くと
「君達は外に出たいんでしょー？力をつけておいて損はないと思うよ・・？
外の世界には私みたいなのがいっぱいいるんだよ？」
と言ってきた。
俺は絶句した、俺達は強いと思っていたがそれはこの島だけだったようだ。
それも知らずに海出れば俺達は早死にするだけだろう。
俺は悔しさが残っているが、３人で相談した結果修行を受けることにした

だが、その前に聞いてほしかった。オレの父親のことを
俺の父親の事を出して離れていった大人は少なくない。
これを聞くまで俺はあいつに気を許せない。

手合わせが終わり帰ることになった俺達はルフィとサボに先に帰るように言い
レオナには残ってもらった。
これを聞く時、俺は緊張で心臓がバクバクとなる。
怖い・・また知った人が離れていくと思うと・・・
レオナはそんな俺の態度に何も言わずじっと待っていた。

「お、俺がもし海賊王の息子だって言ったらどうする!」
聞いてしまった、だが・・・あいつは気にしないと言ってくれた。
俺は俺だとも言ってくれた・・・俺は嬉しくてその場で泣いてしまった。

泣いているとレオナが俺を慰めてくれた。
その気持ちがさらに嬉しさを倍増させた

やっとのことで泣き病みダダン家の方へ歩いている時に
俺はレオナに「絶対言うなよ！」と口止めさせた。
だが返ってきたのは「じゃあおねえちゃんって呼んで？」だった・・。
驚きすぎて「はぁ!?」と口に出してしまった。
どちらも譲らず「じゃあルフィ君達にいおっと」と言われ俺が折れた。
「姉ちゃん」さすがに恥ずかしい。「姉貴」と呼んだら初めは
微妙な顔をしていたが納得したらしく笑顔になっていた。
俺もルフィ達にからかわれたくないしな！うん、そういうことにしておこう！
俺は新しく家族に『姉』ができた。

○レオナｓｉｄｅ

あれからエース君に「姉貴」と呼ばれるようになり
それを聞いたサボ君とルフィ君はびっくりしていた、あの顔は面白かったよ！
サボ君も「エースが認めたなら」と姉ちゃんと呼んでくれるようになった。
ルフィ君は相変わらず呼んでくれるから可愛い！

それからほぼ毎日エース君達を鍛えるようになった。
ある程度の事ができるように・・。

それから1年がたった頃・・・
その日はダダンさんの家で4人ゆっくりしていた。

エース君達3人は身長が少し伸びたようだった。
私は髪も伸び背骨当たり前である。洗うのが大変だから切ろうとしたら
ダダンさんも含めてエース君達に泣きそうな顔で止められた。
可愛い弟君たちの頼みだから切らないことにして毛先を整えるくらいにした。

そうしてゆっくりしていると突然扉が「バァーン!!」と大きな音を立てて開いた。

そこにいたのは・・・

「ガッハッハ!!!久しぶりじゃのう!孫達よ!!」

豪快に笑うガープ父さんだった・・。

３人は青い顔をしてこの世の終わりみたいな顔をしていてガタガタと震えていた。

そんなに苦手なの・・？

３人は話せそうではなかったので私が口を開いた。

「父さん!久しぶりです。今日はどうされたのですかー?」

「おぉぉ!!レオナ久しぶりじゃ!おぉ・・1年でさらに可愛くなりおって・・・

後で一緒に・・って違う違う。えっと・・そうじゃ!今日はレオナを

向かえに来たんじゃ」

私はいよいよと思っていた。ずっといるわけもないなと思っていたので日ごろから

覚悟を決めていた。

でも3人は違うようだ・・それもそうだと思う。いきなり来ていきなり知り合いが出て行くなんていわれれば・・・。

「じじい！姉貴は出て行くのか!?この島を！」

エース君の言うことにサボ君とルフィ君も同じことを言いたいような顔していた。

「エースお前！レオナを姉と呼んでおるのか!!ガッハッハ！言い事じゃ

さすがレオナ！わしの娘じゃ！

・・・そうじゃのう、元から1年ほどと決めておったんじゃ。」

「うるさい！それで・・姉貴はこの島を出て何をするんだ?」

「何をって・・海兵になるに決まっておるじゃろう」

「はぁ!!?姉貴海兵になるのか!?」

「そうだよー?私は海兵になるのが一番だと思って～。知り合いもいるからね！」

「そうか・・姉貴が一番に海に出るのか・・・しかも海兵か・・。

オレの船に乗ってもらうつもりだったんだけど・・」

「はぁ!?エースお前姉ちゃんと行くつもりだったのか!?それだけは絶対

許さないぞ！姉ちゃんが乗るのは俺の船だ!!」

「エース、サボ！姉ちゃんは俺の船に乗るんだ!!毎日おいしいご飯作って

もらいてえんだ！」

私の前で３人は言い争いを始めた。
それを見て私は「ふふ」と笑みがこぼれる。
私は幸せだなと改めて思った。
「レオナ・・お前さんモテモテじゃな。だがレオナが乗るのはお前さん達の船じゃない！私の船じゃ!!そして気様ら海賊になんぞさせんと毎回言っておるだろうが!!愛の拳が必要なようじゃの!!ハァ～」
「「「ぎゃあぁぁぁぁあ!!!」」」

止めるのかなと思っていたら何故か父さんも争いの輪に入っていった。
父さんさらに悪化させてどうするの・・

それからしばらくして私以外の４人が落ち着いたようだ。
「出るのは明日の朝だからの、今日はゆっくり休んでおくじゃぞ」
と父さんは船に戻っていった、海兵さん達もいるらしい。

その日はいつも以上にご飯を豪華にした。お別れ会ということで多いに盛り上がった。

ダダンさんは「うぉぉぉお」と号泣していたけど「二度と会えないわけじゃないよ～」と慰めている時間のほうが長かった。

お別れの宴会も終わり寝る時に私は4人で寝ようと提案した。
誰も拒否しないで川の字で寝る事にした。
そんな時エース君が話しかけてきた。
「姉貴・・俺とサボとルフィは海賊になるのが夢なんだ・・」
「うん」
「でも姉貴は海兵になる、もし俺達が海に出たら俺達は敵同士になるのか？」
「ふふっ・・・」思わず笑ってしまった。
「ッ!!俺は真面目に聞いてるんだぞ！ったく・・・」
「わかってるよ～、ごめんね？そうだね、本当は海軍と海賊は敵同士だね」
「っ・・・」
「でもね？海軍である前に私はエース君達の姉だと思ってるよ？だからもし
エース君達が危ない目にあったり、助けを求めたら私は助けに行くよ？
それが海軍を敵に回すことになってもね？だから安心してね・・・
私はエース君達が海に出て活躍するのを待ってるんだから！」

「そうか・・・そうかっ!!」
それから私は笑い合い眠りについた。

次の日の朝私はダダンさん達にお礼を言った、その時ダダンさんはまた泣いてしまったが
山賊さん達に慰められながら別れた。

そしてフーシャ村に降り村長さん達にも別れを言った。
フーシャ村には次きた時ゆっくりしようと決めた。
そして船に乗り村を出た。
その時海岸の方から

「「姉ちゃ～～～ん!（姉貴!!」」

私は声のするほうを向いた。
そこにはエース君、サボ君、ルフィ君の３人が居た。
何かと思っていると３人は手作りのような旗を掲げ声を揃えて。

「「俺は、海賊王になる!!」」

３人は満面の笑みで言った・・・。

私は大声で「待ってる!ずっと待ってるよ!」と大声で返した。

後ろで父さんは「あいつらまだ海賊になるとぉぉぉ!!」

と青筋を立てて叫んでいた。

そうして私は３人と別れ海軍本部に向かった・・・

＊＊話 「黒獅子、その２」

○ゲールｓｉｄｅ

俺とこいつ（レオナ）は、ある日いつものように散歩していた。

しかし何かいつもと違う違和感を感じた・・・

これは・・・人間の匂い・・？

こいつも気づいたようだ、幼い割に鋭いらしいな。

「行ってみよ!ゲール」という声で俺達は匂いのする方へ向かった。

・

・・

・・・

海岸に着き周りを見渡すと少し離れたところに多くの人間共がいた
俺は警戒し危ないと思ったがこいつは行きたいようなので
警戒心を強く持ち向かう。

人間達の近くに行くと此方に気づいたようであちらも警戒しているようだった。
俺達は相手の様子を伺っていた、何故かこいつはニコニコしているようだが・・・。
人間達が何かを話しているようでしばらくすると
あいつらがこちらに向かってくる。しかも様子を伺うとどうやら
捕らえる気らしい。
そんなことを考えていると俺の背中に乗っているこいつから
凄まじい殺気があいつらに飛んだ。
その瞬間こちらに近づいてきていた人間達が一斉に倒れていった。
少し離れていた何人かは倒れはしなかったが驚いているようだった。

俺が何故こいつの殺気に驚いていないのかって?
前に俺達が一緒に散歩している時にオレより大きめな熊が出てきたんだ。

俺はこいつが一緒だからと逃げるつもりでいたが、逃げようとした瞬間
熊は倒れていった。
その時に俺はすごく驚いたんだ・・・熊が倒れた事もそうだが
こいつから出てきた殺気・・・あれを食らうと思うと冷や汗が
出てくる。

それからこいつは俺に「ちょっと待っててねー」と言い俺から降りて
あいつらの方へ向かって言った。
何かあったらの時のために俺は一応警戒は解かないでおく。
あいつらは何か話しているようだ。
特に言い争うこともなさそうだったから俺は警戒を解こうとした。
その瞬間あいつとあっちのガタイのいい人間が構えだした。
いきなりのことで驚き、体制を整えながらもあいつの方へ助けに行こうとすると
あいつが此方を見て「待っててね」と声は出して居ないが口を動かした。

そうして二人は喧嘩を始めた。
どうやらお互いに殺す気はないらしい。

ならば俺は見届けるまでだ。
俺自身もこいつの実力を見るのは初めてだ。

その勝負を見届け・・・俺は頭の中が真っ白になった。
そして本能的にこいつが敵じゃなくてよかったと心底思った。
こいつと相手だった人間は本当にあの人間かと疑った。
しかもこいつは最後に放った何かわからないが・・・
遠くに見えた島が吹き・・嫌・・消し飛んだ。

俺はこんなやつと一緒にいたのかと無知な自分を呪った・・

そして喧嘩も終わり、こいつの口ぶりからしてあっちの人間達に誘われているようだった。
それにあいつもどうやら行く事にしたようだ・・・。

そうか・・こいつは島を出て行くのか。
それもそうか・・こんな島にいるより同じ人間達と一緒にいたほうがいいよな

あいつらも悪いやつらじゃなさそうだしな・・
だが・・・
俺はまた一人になってしまうのかと考えてしまっていた。だが・・・

あいつがいつの間にか俺の目の前にきていた。
そして・・・

「ゲール私と一緒に行こ・・？もし家族とかいるならしょうがないけど
私はゲールと毎日いて楽しかったし初めての家族だもん」
俺は嬉しくて涙が出そうになった・・
もちろん断るわけもなくついていくことにした。
俺はライオンでこいつは人間だ。
それなのにこいつは家族と言ってくれた。
俺はこいつをライバルだと初めに思っていたが頭に浮かんでくるのは
こいつと一緒に散歩したり食事をしている時の楽しいことしか浮かんでこない
そうか・・俺も知らないところでこいつを・・
俺は気づいた。

そして俺はこいつと一緒に船に乗り島を出た。
そして人間からこいつに『レオナ』という名前を与えられたらしい。
俺とレオナは見えなくなるまであの島を記憶に刻み込んだ。

それから俺達は人間達が向かっているところについた。
人間達の乗り物はなかなか窮屈だった、あまり動けなかったからな
目的の場所についた俺達はどうやら別々の所に行く事になったようだ。
俺とこいつが離れる許せなかったがここには大勢の人間達が暮らしているらしく
混乱させないようにするためらしいとレオナから聞いた。
レオナは人間達について行き、俺はどうやら他の動物達が暮らしている所に
行くらしく案内された。
着いてみるとどうやらここにも位があるらしい。
大型や肉食は大きい顔をしており草食や小さい物達は影で怯えながら

暮らしているようだ。
俺は肉食でかなりの大きい方に入っていたため何も問題はなかったが・・
レオナだったら力のないあいつらを守るだろうな・・
それから何日も過ぎそこの暮らしや現状を把握した。
そんなある日レオナがやってきた。
そこで俺は話を聞いた、どうやらここを出るらしく長い期間らしい。

俺もついて行くと言ったがレオナに止められた。
「何故だ!」と聞くとレオナは周りを見て口を開いた。
「今度の場所はね?どうしても連れていけないの。それは私のためでもあってゲールとこれから一緒に暮らすためでもあるの・・・
それにね?ゲールはここであの子達を助けてほしいの。
私と一緒にいてくれたゲールならできるでしょ?優しいんだもん。
だから私が帰ってくるまでここで守ってあげて・・?」
俺は何も言えなかった。
こいつは「俺のため、そしてあいつのため」と言っていた。
しかもこいつ等を守れと頼んできた。

1回来ただけで気づいたことにも驚きもしたが
オレはこいつの期待を裏切るわけには行かなかった。
それはこいつがオレを頼りにしていることが一番大きかった。

俺はこいつが帰ってくるまで弱い物達を守り、こいつが帰ってくるまでにここを変えてみせると意思を固めた。

それからレオナは島にきた人間達とここを出ていった。
俺は俺のやることをする・・それだけだ。

俺は、頼ってきたあいつのため一歩を踏み出した。

１１話「海兵としてのスタート」

○レオナｓｉｄｅ

ルフィ達、そして村の人と別れてから１０年ほどたちました！
いろんなことがあったなぁ・・・

まず私達はあれからガープ父さんと海軍本部に戻った。
その時海軍のおつるさんやその海兵さんそしてセンゴクさんが出迎えてくれた！
海軍の人たち曰く海軍本部のトップが出迎えたということで
その日は海兵達もざわついて落ち着かなかったらしい。
ごめんなさい・・・私のせいです（泣
でも嬉しかったです！
海軍本部に着いてゲールにも会いに行った！
最初私を見た時ものすごい勢いでじゃれ付いてきた。
顔を何度も舐められたときはすごくくすぐったかった。

そしてどうやら私が頼んだ通り草食動物、小動物を守っていたみたい。
ゲールの背中に乗ったりしてるリスや、うさぎがいたんだもん
「ありがとうね?ゲール」と言ったら自慢気にしていた。
それが面白くて思わず「ふふっ」なんて笑っちゃった！

あれから私の身体は、大きく変わりました！
身長は１６０後半くらいで、赤く輝く髪の毛は変わらずで背骨まで伸びる
さらさらストレートで灼眼の〇〇ナみたいな髪型に似てるかな！
大きい金色に輝いたまん丸の目はしだいに垂れ目になっていった。
身体も一番苦労していた胸は、メロンみたいな大きさにまでなっていて
正直重たい。ブラをつけることも考えたけど未だに少し抵抗があるし
小さく見せたいという理由もあってサラシをきつく巻いている。
ただそのサラシも何回か使っていると破けそうになるから定期的に変えている。
くびれも出来てお尻にも女性らしい丸みを帯びてきた。

母さん曰く可愛いより綺麗らしい・・・
そして正式に私は海兵になることになりました！

実力はあるもののまだ年端もいってないからとある程度身体が大きく
育つまで訓練所のようなところで過ごしました！
そこで何をしてたかというとただ修行かな・・？
実力は折り紙付きだからって訓練兵さん達とは別に修行してた。
大変だったんだよ・・？
私が訓練兵さん達がやってる修行から外された時
逆に非力だから外されたと思ったらしくて・・・
休憩時間に訓令兵の男の人たちがやってきて
「おいおい～可愛そうだな～。俺達が教えてやろうか？はっはっは」
みたいなこと言ってきた。
訓練兵の中には女性も数人いてやっぱり肩身狭かったみたい。
そんな中それを私は一人組み手みたいなことしながら「お構いなく～大丈夫なので～」
と返したんだけどそのまま帰らなかったみたいで気づいたら私の近くまで
来てたみたいで・・
「そんなこといわずにさー」って私に触ろうとしたらしくて
タイミングも悪くてその時力を入れて廻し蹴りしちゃったんだよね・・・

それがその訓練兵さんにあたっちゃって海まで吹き飛んでいっちゃった。
私も当たったことに気づかなくて一人組み手が終わって周りをみたら
訓練兵さん達はポカーンとしたり青い顔をしている人がこっちを見ていた。
何かあったのかな？って思ってたら女性の訓練兵さんが教えてくれた。
あらら・・・またやっちゃったみたい・・
海の方へ行って吹き飛ばしちゃった人を助けてあげたら
何度も「ごめんなさい」と謝られた・・・そこまで・・？

そこから訓練兵さん達の女性に対する見かたもちょっと変わったみたい！
女性の訓練兵さんにも感謝されたし！

そこで１０年過ごした。ちなみに１０年の間寮みたいなところで生活していたから
父さん達にも会ってなかった。センゴクのおじさんは偵察という理由で時々見に
きてくれた。
父さんと母さんは卒業して会うのが楽しみ！
そうそうその訓練兵の中になんとですね！「たしぎ」ちゃんがいたんですよ！
原作の人ですよ！しかも想像通り「ドジッ娘」でした!!

メガネをなくしたり何も無い所で転んだりとかで可愛かったし
ほっこりした・・・
そしてたしぎちゃんはやっぱり名刀大好きでした！
名のある剣を見つけると口がとまらなくて一緒に居たときなんて
１時間くらい聞き役してました。
ちょっと疲れたけど目を輝かせてるたしぎちゃんも可愛かったです！

訓練兵を卒業する時、たしぎちゃんは何とか大佐っていう人のところに軍曹の位として
就くって聞いた！なんだっけ・・・あの煙の人・・けむやん大佐だっけ・・あれれ・・
そして私は実力は問題ないけど実務経験が無いって言う事で少尉の位に就くことに
なりました！
海軍は少尉から将校という上官になり『正義』と刻まれたコートを
着る事を許される。
私にもそれが届くとのことだったけど実際届いたのを見てみたら

コートじゃなくて料理するときに使うせいぎと刻まれた『エプロン』だった・・・
届けてくれた海兵さんに「え、エプロンなんですけどー・・」と聞いてみると
海兵さんも驚いてたみたい！口を大きく開けて驚いてた。

海兵さんに一応お礼を言って私は本部内にあるセンゴクのおじさんの所に
聞きに言った。
センゴクさんは私が持っているエプロンを見て何故か汗を垂らして目を
泳がせていた。
これは絶対怪しい・・・と思いながら問い詰めると
どうやらガープ父さん、つる母さんそしてその海兵さんそしてなんとセンゴクのおじ
さんが決めたことらしい。
※この時のセンゴクのおじさんから見たレオナは身長差で見上げる体勢になってお
り
うるっとさせた瞳、そこから頬を膨らませて見つめられるという誰もが落ちるコンボ
だったという

エプロンの理由は「可愛いから」らしいですよ？

私はあのコート着たかったのに・・・
そんな事を考えてセンゴクさんを睨んでいると
どうやらセンゴクさんは父さんと母さんを呼んだみたい・・。
父さん達が到着して部屋に入ってきたら私を見て
「レオナァー!!会いたかったぞぉぉ!!こんなに綺麗になりおって！
（スリスリスリスリ」
「もー・・父さんったら相変わらずだねー！少し老けちゃったんじゃない？」
「ガッハッハ！お前さんが大きくなるんじゃ、わしらも老いる
だが・・まだまだ若いもんには負けんぞ！」
父さんにハグされながら
「母さんも久しぶり～。相変わらず苦労してたみたいね～！
よく私の耳にまで届いてたよ～！」
「おかえり、レオナ。そっちにまで言ってたのかい？はぁ・・その通りだよ・・
お前が帰ってきたから少しは落ち着けるといいんだけどね」
「・・父さん？母さんに無理させちゃだめだよー？後センゴクのおじさんにも！
分かったー？」
「う、うむ・・すまなかった・・だからその顔はやめてくれ！

直視できないんじゃ!!」
と目を逸らしていた父さんを見ていたセンゴクのおじさんと母さんは笑っていた。
この3人は相変わらずのようで安心した。
そんなことよりも・・・
「それでね?父さん母さん私の所にこのエプロンが届いたんだけど・・・」
私は聞くと母さんと父さんが口を開いた。
「あぁ、それはね。あたし達3人とうちらの海兵達がコートよりもこっちのほうがお前に似合うだろうと決めたんだよ」
「そうじゃ!お前さんは料理も出来て家事もできてたじゃろ?お前さんにはこっちの方が似合いそうじゃったしな!ガッハッハ」
「はぁ・・でもコートもきたかったのになぁ・・・(うるうる」
「ニッ!!!???」
「れ、レオナ。ならそのエプロンを着てくれるならコートも送ろう」
「そ、そうじゃな。それでどうじゃ?」
「う、うむ。私もそう言おうと思っていた」

「わぁ・・コートももらえるんだ！ありがとう～（ニコッ」
「「ッ!!!!」」

私がお礼を言ったら3人が固まった・・なんで・・・

父さんとセンゴクさんが
「あのハンコックのやつと同じかそれ以上の美貌であんな笑顔を向けられたら
普通のやつは簡単に落ちてしまうじゃろうな・・」
「私達が守らねば・・・」
と話していた。　ん???

そんなことで私は少尉の海軍将校として新たにスタートしました！

１２話「モモンガ中将」

○レオナｓｉｄｅ

私は今恥ずかしさのあまり俯いています。

海軍本部の集会に出るぞと言われ私は出席しました。

私も将官クラスということで列に並んだんですけど・・・

前でセンゴクのおじさんが演説をしているのに

横目で見られてます・・・うぅ・・・恥ずかしい・・・

絶対このエプロンのせいだよ～・・・もぅ・・

父さんと母さんなんて「やってやった」みたいな満足そうな顔だし・・。

・

・・

・・・

それからいつの間にか集会が終わっていて部屋に戻ると

伝達の海兵さんがきて、わたしに異動が下されたようです。

伝達をくれた海兵さんにお礼といい私はその異動先へ向かいました。

「お前があのガープ殿の娘のレオナか、私はモモンガだ。
　これから副官として私の補佐をしてもらう。
　俺の部隊では特別扱い等はしないつもりだからそのように。」
「はい～、よろしくおねがいします～モモンガ中将！」
「はぁ・・・その気の抜けたようなしゃべり方はどうにかならないのか？
　海兵たちも気が抜けそうな・・・」
「はぁ～すみません・・・これが私のしゃべり方で・・（シュン」
「ま、まぁいい・・仕方ないからな。それで・・・そのだな・・
　そのエプロンはなんなんだ？」
「あ・・これはガープ父さんたちがこれを着るなら正義のコートをくれるって
　言われまして・・・」
「あぁ・・なるほど。お前も苦労しているんだな、集会のときは大変だったな。
　皆に見られて・・・」
「！分かってくれますか!?私の苦労・・うぅ・・ありがとうございます～（グスッ」

そうして私はしばらくモモンガ中将に慰められました。恥ずかしい・・・

今私はモモンガ中将と事務処理をしてます！
モモンガ中将は自分でしか処理できない書類を
私は簡単な書類を処理しながら定期的にお茶や手作りのお菓子をお出ししてます！
それくらいのことしかできないからね～
そうそう私の料理の腕はさらに上がりました！趣味としてやってた料理が
さらに凝っちゃうようになってお菓子も作れるようになったよ！
海軍の料理係さんに味身してもらったら真っ青な顔で
「お、俺よりもおいしい・・・」なんて小声で言ってた・・
でもモモンガ中将はやっぱりかっこいい！
黒いチョンマゲに大きな太刀を持ってる。あれで海王類もきったんだって！
すごいよね～、剣士って憧れちゃうなぁ・・・私も剣持てるけど
すぐ折れちゃうんだよね・・・なんでかなぁ・・
え？何・・？それだけじゃなくて海王類なら私も倒せるだろって・・？
ナ、ナンノコトカナ・・・ワタシワカラナイヨ

そして事務処理も終わったらモモンガ中将に将官の仕事として海兵の指導をしてこいと言われて向かいました。

○海兵ｓｉｄｅ

俺たちは今日慌しく過ごしていた。
基本俺たち海兵は自主修練をして定期的に将官から指導されるということになっているんだが今日はその指導の日。
しかも今日は新しく将官になったレオナ少尉という女性の方らしい。
だけど女性だからって怠けてちゃいけない。
将官によっては遅刻すれば
１時間以上怒鳴られる者もいれば
殴られたりする者もいる。

最悪の場合殺されかけたり「海軍を出て行け」と辞めさせられるものもいた。
だからこそ遅刻しないために俺たちは急いで準備をしている。
海兵たちと話していた時あのガープ中将の娘だからまともなはずがないという
答えを出してしまい、みな青い顔をしていたのを今も思い出す・・・

それから俺はなんとか修練所に間に合った。
集合時間は、将官が来るまで・・・「レオナ少尉」が来るまでだ。
皆走ってきたため息も切れきれになっていた。俺も含めて・・・
それから息を整えたころ、前の方からコートをきた女性がこちらへ向かってくる。
「レオナ少尉」だろう・・・そして近くに来たころ俺たち海兵は、
目を奪われた、その美貌にだ。
太陽に照らされ輝く赤い髪が風にさらさらと揺れてたなびいている。
特徴的な垂れ目に整った顔立ち・・・
そして身体も全体的に細いが胸はいわゆるメロンサイズと言えば分かるだろうか。
そして横から見えた感じだがくびれもはっきりしている。
そんな美しさを持った女性がやってきたのだ、目を奪われないわけがない。
しかし・・・何故エプロン・・?「せいぎ」とひらがなで書いてあるし・・

そして俺たちの前にきてレオナ少尉は止まり周りを見渡すし口を開く。
「私が本日指導を行います、レオナです～。階級は少尉となります！
初めての指導ですががんばりたいと思います（ニコッ」
「「「「は、はい～／／／」」」」
見蕩れる笑顔に俺たちは顔を真っ赤にしていた。
そしてレオナ少尉は笑みを浮かべたまま名簿を見て点呼をする。
しかし・・・
「あら？二人いませんねー・・遅刻かな？」
その声でぼーっとしていた俺を含めた海兵は我に返り青い顔をしていた。
その中には震えているものもいる。
「少し待ちましょうか・・」そこから流れた時間がすごく遅く感じた。
しばらくすると息を切らしながら走ってくる海兵たちが見えた。
レオナ少尉も気づいたらしくそちらを振り向く。
「「遅刻してしまい、申し訳ございませんっっ!!」」

レオナ少尉が口を開く前に遅刻した二人の海兵が頭を下げた。
レオナ少尉は笑みを浮かべておらず、眉を下げていた。
「そうですね～遅刻したことは悪いことです。もし民が海賊に襲われて
その遅刻が原因で民が犠牲になったらということを考えて見てください」
そういうと二人の海兵は青い顔をさらに真っ青にしていた。
「分かったようですね～それなら次は気をつけてくださいね？
じゃあ列に戻ってください（ニコッ」
その言葉で二人はキョトンとしていた。
俺たちもだ。
「えっ・・少尉・・俺たちはお咎めとかは・・・」
「一度の失敗でしませんよ？誰にだって失敗なんてあるんですから・・
次気をつければいいですよ？ほらはじめますから戻ってください」
「は、はいっ!!」

俺たちは夢を見ているのかと思った。
今までが今までだったために、遅刻すればそれ相応の罰を受けた。
でもこのレオナ少尉は、失敗すれば繰り返さなければいいと言って許してくれた。

列に戻った海兵は泣いてるし・・

それくらい覚悟をしていたんだ。
二度目のチャンスをくれたんだ、次は失敗はしないだろう。
あの優しさを教えてくれた方なら俺は命をかけてもいいとそう思った。
どうやら他の海兵たちも一緒のようだ。
これがレオナ少尉・・この人のようになりたいな・・

しかし・・その指導は鬼だった・・体力が足りないということで
鬼ように広い海軍本部の周りを走るということになりみんな白目になっていた
ということを忘れてはいけない。
そしてレオナ少尉も俺たちと走ったがバテテいた俺たちと違い
ニコニコとしながら息切れなんて1回もしてなかった。
エプロンをつけて、コートを羽織ってヒールを履いて走ったこの人を見て
俺たちは
あぁ・・・この人も人間やめてるんだなと思った。

○モモンガｓｉｄｅ
今日私に新たな副官と新しい海兵たちがくると伝達が届いた。
どうやらその副官はあのガープ殿の娘らしい。
不安しかないのだが・・・

それから私は事務処理をしていると・・
コンコンッ
どうやらきたようだ・・
「失礼いたします～」
と入ってきたのは異常な美貌を持った女性だった。
どうやらこの女性が新しい副官らしい、だが何故エプロンをしているのだ・・？
後で聞くとして・・
「お前がレオナ少尉か？私はモモンガだ。これからよろしく頼む。
私の副官として就いてもらう。仕事は私の事務補佐と海兵たちの指導だ。

いいな？」
「はい～よろしくお願いします、モモンガ中将」
笑みを浮かべ言ってきた。
ふむこの笑みも・・どこか安心感を感じさせるな・・・
それから私はエプロンのことについて聞くと
どうやらガープ殿、つる殿、元帥殿がかかわっているらしい。
ガープ殿はまだ分かるがつる殿、元帥殿は何をしているのか・・
「苦労しているのだな」と言うとレオナ少尉は泣いていた。
私は何も言えず慰めることくらいしかできなかった。

それから私とレオナは事務処理をしている。
私は自分しか処理できない書類を片付けている。
レオナはそれ以外の書類を片付けているがどうやら事務能力は高いらしい。
他の尉官・・もしくは左官より上かもしれない。
それに一番驚いたのがその気配りである。
私が一息入れようとするとタイミングよくお茶や手作りのお菓子を出してくれた。
手作りのお菓子もお茶に合いとても美味しかった。

個性の塊のような集団である海軍にとってこのような優しさをもった女性は将官は珍しい。
俺は思ってもいなかった副官を自分に就いたことに内心感謝し
私は他の将官に渡さないようにしようと心に決めた。

１３話「大将赤犬」

○レオナｓｉｄｅ

こんにちは！レオナ少尉です。
あれから私は変わらない日々を過ごしました！

モモンガ中将の事務補佐はもちろん海兵さん達の指導も欠かさずしています！
最近はモモンガ中将にお茶を持っていくと「いつもすまぬな」なんて言ってくれるし
事務仕事をしながら私の相談に乗ってくれたりグチまで聞いてくれてる。
私の周りには個性的な人ばかりでこういうしっかりした人がいなかったから
すごく嬉しかったです！
センゴクのおじさん？まともな人はエプロンなんて作らないですよね??

それから１ヶ月程度すると指導はまた違う将官の順番に回るらしいです！
だから私はしばらく事務仕事くらいかな？

私が指導最後の日、それを皆に伝えるとみんなは号泣していた。
思わず私ももらい泣きしっちゃったくらいだし・・。

海兵さん達は最初こそ体力はなかったものの私の訓練の成果もあったのか
走っただけではバテないようになってた。
休憩も必要だと思って私特製の栄養ジュースとかおにぎりとか握っていってあげたら
それまた喜ばれた。
特製ジュースはポ〇リスエットに似てると思う。
そんなこともあって私は海兵さん達の指導も楽しくやってた！

そんなある日・・・
いつものようにモモンガ中将の事務仕事を手伝い、休憩ということで
私はお菓子を作りに食堂へ向かっていたところ・・・

「こんの・・バカタレどもがっ!!」
海軍本部に響き渡るほどの怒声がした。
その声のした方を見てみるとどうやら指導している将官と私が指導していた海兵さん達とは違う部隊の人たちが見えた。
その将官の人をよく見て見ると・・ガタイのいい身体に渋く服は赤いスーツを着ていた。

――――　赤犬殿、サカズキ大将だった。

どうやらサカズキ大将に言われた訓練内容をこなすことができなかったらしく怒られているようだった。
なんとか立っていながらもふらふらとしている海兵さん達は必死に耐えているようだった。
他の部隊がいる中であんなことをされては士気にも関わるし何より心が折れてしまう。
しかも海兵さん達をよく見ると脱水症状のようだった・・・
私は我慢できず

気づけばサカズキ大将の方へ向かっていた。

・

・・

・・・

「この程度もできんのかい・・・海兵としてのはｚ「サカズキ大将」誰じゃ
お前さんは」
「レオナ少尉と申します。お一つよろしいでしょうか？」
「なんじゃ」
「差し出がましいかもしれませんが、まずこの海兵達の実力を知るのが先なのでは？
あなたの指示されたないようですと力を付ける前に潰れかねないと思うのですが」
「っフン。何を言うと思っちょったら、年端も行かない小娘に説教されるとはな
だが・・これしきのこともできんようじゃ、海兵としてやってられん。
それにこんなやわな海兵などわしら海軍の『恥』じゃ。」
『恥』・・・不満も漏らさず無理難題な指示された訓練を絶えて頑張っていた海兵達を

恥と・・・このような方に上に立ってほしくはありませんね・・・
内心イライラしていたけどそれをぐっとこらえた。

「なるほど・・・ですが、それにはまず体力が必要になります。
この中には新しく入ったばかりの海兵もいるのですよ?未来を担う若者を
ここで潰されるのですか?家族もいる海兵もいるのですよ?」
「それでへばるようなら海兵にはいらん、力こそが正義じゃろう。
お前さんもこんなところで説教たれとる場合か?
それと言っとくが尉官であるお前さんが大将であるわしに説教したという事は
何をされても問題ないということじゃろうな?ゴボボボボ」
私を見下しながら右手をマグマに変形させて脅かしてきた。
でも私はもう限界だった。
「力こそが正義・・・なら私があなたに何をしても問題ないということですね?（ニコッ」

その瞬間隠していた覇王色を一気にサカズキ大将に当てる。

「ッ!!!!???」

どうやらサカズキ大将は驚いているらしい。
海兵達には当ててないため不思議そうにしていた。
危ないからととりあえず海兵達を下がらせる。
「お前さん・・・本当に少尉か?」
「はい～そうですよ?それがどうかしましたか?サカズキ『大将』(ニコニコッ」
「ふぅ・・どうやら説教が必要なようじゃのう・・わしに敵意を見せたんじゃ
文句は言うな」ゴボボボボボ
私は笑顔のままサカズキ大将と対峙する・・・
「礼儀も知らんガキが・・家で静かにしちょ「螺旋脚ッ!」グフッ!・・・」バタリ
サカズキ大将は私にマグマを覆った拳で私に殴りかかってきたが・・
私には届かない。
殴りかかってこようとした拳を避け、足に覇気と纏い
懐に飛び込みサカズキ大将の顎に後ろ回し蹴りをし脳震盪を起こさせた。
そのためサカズキ大将は絶えられず気絶した・・・

「誰かを守る力のほうが私は何倍も強いと思いますけどね。その力であれば正義として掲げてもいいかもしれませんね」
そう私は口にし気絶したサカズキ大将をそのままにし、海兵達を一度休むようにと帰らせた。
その後聞いたけどサカズキ大将は他の海兵に見つかり救護班に運びこまれたらしい。
身体や脳に異常はなかったみたい。
そして案の定噂も流れた。それも一つじゃなかった・・
「あの優しいレオナ少尉を怒らせると大将が気絶する」とか
「レオナ少尉は俺達海兵のことを一番心配してくれるお母さん」とか
「レオナ少尉の実力は大将クラス、もしくはそれ以上」とかね・・
「レオナ少尉の生足だけでご飯何杯もいける」なんていうのもあったけど
最初聞いた時私は鳥肌が立った。

サカズキ大将を倒した私はその足でセンゴクのおじさんの所へ言って謝った。
怒られると思っていたけど

「ワタシもあいつのいきすぎた所は注意しようと思っていたところだった。
今回の事はあいつに否があり、少しは変わることだろう」
と言ってくれた。

それとどうやら私の日ごろの成果が認められたのとサカズキ大将を倒した事で
階級が変わるらしいです。どのくらいになっちゃうんだろ・・・
「尉官で3人しかいない大将に対抗できるのはお前くらいだな」と
おじさんが言ってた。なんかすみません・・・

それから父さんと母さんにも報告しました！
父さんは
「ガッハッハ！さすがわしの娘ッ！もう大将に勝てるほどの実力になっておるとは!!」
なんて笑ってた。
母さんは
「もうあんまり無理するんじゃないよ、ケガなんてしたらどうするんだい」
と心配してくれた、でもなんだか嬉しそうだった。
どれだけ慕われてないの・・サカズキ大将・・

１４話「昇格と変態」

○レオナｓｉｄｅ

こんにちは！レオナです。
サカズキ大将との１戦で私は少佐になりました！中尉、大尉を無視して
飛び級です！
初めは大佐くらいにしようかっていう話だったみたいだけれど会議の結果
私のことをまだ知らない海兵達の反発があるかもしれないということで少佐に
落ち着きました！

そしてサカズキ大将ですが・・・特にケガとかはなかったみたい。
１戦が終わってしばらくしたら脳を揺らしたからってだんだん心配になって
たんです・・・よかった。
ただ万が一ということもあるらしいのでまだ医療棟で休んでいるそうです。
治ったら一応上司ということもありますし謝りに行こうかな・・

そして私はいつもと同じくモモンガ中将の事務補佐をしてます！
モモンガ中将も私とサカズキ大将の事を聞いたらしくため息をついて
「ほどほどにしておけよ」と言ってた。怒られなくてよかったぁ・・・
そしていつもみたいに書類を片付けてモモンガ中将にお茶とお菓子・・今日は
味も見た目もリンゴみたいなものがあったのでアップルパイにしてみました！
モモンガ中将喜んでくれるかな・・
お菓子を出してから私はとりあえず時間が余ったのでお菓子を持って
ひさしぶりにセンゴクのおじさんに会いに行こうと思い向かいました。
ところが・・・

――――　ある廊下にて

私はおじさんの所に向かっている途中で廊下を歩いていたところ・・・

トントンッ

肩を叩かれたような気がして振り向かえって見ても誰もいない。

気のせいかなと思ってまた歩き始めると・・・

トントンッ

やっぱり！と思って振り向かえると誰もいない。

私は怖くなって少し早足でおじさんの所へ向かおうとした時・・・

「ひゃんッ!!」

今度は肩じゃなくてお尻を触られました！

触られたこともそうだけど私からあんな声が出てきたことにさらにびっくりしていると・・・

「よぉ・・・嬢ちゃんがレオナちゃんか？」

後ろからした声の方を見ると、そこにはあの松〇優〇似でアフロヘアーの男性が・・・

「どうした、俺に惚れちゃったかい？」

「きゃ・・・」

「きゃ⁇」

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！痴漢ーー!!!!!!」

「お、おいおい・・!!?」

※しばらくお待ちください

「わりぃな・・・ふぅ・・それで落ち着いたか？顔はまだ真っ赤のようだが・・

可愛いな・・」

「落ち着きませんよー！ホントに怖かったんですよ～？もう・・・
　しかもお尻まで触ってくるしホントに大将さんなんですか??」
「わりぃ、わりいな・・・余りに可愛かったもんで、つい
　ん？嬢ちゃんなんで俺が大将だなんて知ってるんだ？」
「大将さんは３人しかいませんから覚えますよ・・」
「そうか、俺も有名になったもんだ。ま、とりあえず自己紹介しとくわ
　俺はクザン、青キジなんて言われてるな」
　やっぱりこの人が青キジ大将ですか・・原作通りですけどやっぱり大きいですねぇ
「はい、存じております～。私はレオナです、階級は少佐成り立てです。
　よろしくお願いします～（ニコッ」
「っ・・噂どおりだな・・しっかしこれがあのガープさんの娘か・・・
　想像から離れすぎてるな」
「父さんをご存知なんですかー？」
「ガープさんを知らない海兵なんていないぞ。しかも俺もあの人には恩が
　あるんだ」
「そうなんですか～！ところでなんで私のところに・・？」
「あ～・・なんだ・・今日は嬢ちゃんを一目見に来たって言えば分かるか？

あのガープさんの娘でもあるし、ほらサカズキのやつといろいろあっただろ？
噂を聞いて会いにきたってわけよ。」
「噂ですか・・？あの件はお恥ずかしい限りです・・・／／」
「いや、あいつにはいい薬になったんじゃないか？俺はあいつの考えに納得
できなかったしな。まぁそういうことだ、ホントに今日は会いにきただけだからな
それじゃあな・・・嬢ちゃん・・（ムギュッ」

??空気が固まった。私の胸元に何か違和感がある・・・顔を少しずつ下に下げて
自分の胸元を見ると青キジ大将の手がわ、私の胸を・・つかんで・・・
「きゃ・・・」
「きゃ??あれ？この展開・・・」
「きやぁぁっぁぁ!!!!ヘンターイ！チカーン!!うえぇぇん！（泣」バチーン
・・・
泣きながら走り去って行ったレオナを頬に手形のついた青キジは呆然と見ていた。
「あ、あいつの胸の大きさを抑えてたな・・・イテテ・・あいつ覇気
使ったな・・・」

～その後、センゴクの所に顔を真っ赤にさせながら泣いていたレオナが駆け込んできて
慌てたセンゴクはどうしたかと聞くと「あ、青キジ大将に穢されました～うぅ・・・」
と言ったという。
偶然そこで煎餅を食べていたガープとセンゴクは将官クラスでも気を失いそうなほどの
気を纏い、鬼のような形相をして青キジのところへ殴りこみに行ったという・・・
その後発見された青キジは顔を真っ赤にし体中ボコボコで半殺しの状態で
見つかったという・・・